

近代日本民俗学史の構築について／覚書

佐藤健二

Construction of History of Folklore Studies in Modern Japan
SATO Kenji

はじめに

- ① 近代日本民俗学史構築の意義
- ② 日本民俗学史の再点検と地方民俗学史
- ③ 「年表」という技法の功罪
- ④ 郷土での民俗学史のために：主体と場の交錯をたどる
- ⑤ 再び、民俗学における「歴史」とは何か

【論文要旨】

本稿は近代日本における「民俗学史」を構築するための基礎作業である。学史の構築は、それ自身が「比較」の実践であり、その学問の現在のありようを相対化して再考し、いわば「総体化」ともいへき立場を模索する契機となる。先行するいくつかの学史記述の歴史認識を対象に、雑誌を含む「刊行物・著作物」や、研究団体への注目が、理念的・実証的のどのように押さえられてきたかを批判的に検討し、「柳田国男中心主義」からの脱却を掲げる試みにおいてもまた、地方雑誌の果たした固有の役割がじつは軽視され、抽象的な「日本民俗学史」に止められてきた事実を明らかにする。そこから、近代日本のそれぞれの地域における、いわゆる「民俗学」「郷土研究」「郷土教育」の受容や成長のしかたの違いという主題を取り出す。糸魚川の郷土研究の歴史は、相馬御風のような文学者の関与を改めて考察すべき論点として加え、また『青木重孝著作集』（現在一五冊刊行）のような、地方で活躍した民俗学者のテキスト共有の地道で貴重な試みもつ可能性

を浮かびあがらせる。また、澤田四郎作を中心とした「大阪民俗談話会」の活動記録は、「場としての民俗学」の分析が、近代日本の民俗学史の研究において必要であることを暗示する。民俗学に対する複数の興味関心が交錯し、多様な特質をもつ研究主体が交流した「場」の分析はまた、理論史としての学史とは異なる、方法史・実践史としての学史認識の重要性という理論的課題をも開くだろう。最後に、歴史記述の一般的な技術としての「年表」の功罪の自覚から、柳田と同時代の歴史家でもあったマルク・ブロックの「起源の問題」をとりあげて、安易な「比較民俗学」への同調のもつ危うさとともに、探索・博搜・蓄積にとめる「博物学」的なアプローチと相補いあう、変数としてのカテゴリーの構成を追究する「代数学」的なアプローチが、民俗学史の研究において求められているという現状認識を掲げる。

【キーワード】 地方民俗学史、総体化、場としての民俗学、理論史と実践史、歴史認識

はじめに

本稿は、現代において「民俗学」と呼ばれるようになった学問の歴史について、どのように再構築すべきかをめぐる覚書である。

共同研究の期間を通じて、近代日本民俗学史の構築に向けて多少の準備はしてきたつもりだったが、なお掘り下げや広げかたが不十分で、民俗学史を名乗れるようなものを編めるほどの水準にはいたっていない。しかし、日本近代の「民俗学」⁽¹⁾には、まだ測量されていない源流がある。一方で、すでに忘れられ埋もれてしまった研究実践の領域も広く、一人だけの探究や精進で簡単に達成できる課題でもなさそうである。ちょうど民間における「伝承」の発見がそうであったように、問題意識を共有して、そこで見いだされる作業を分担することも有効ではないかと思う。

この覚書は、「民俗学史」研究において共有すべき課題や資料の存在形態を意識しつつ論じてみた、実験的な発想の寄せ集めである。

①近代日本民俗学史構築の意義

なぜ「日本民俗学史」が必要なのか。すなわち、民俗学という学問それ自体の歴史を明らかにするということは、現代の民俗学の実践にいかなる意味をもつのか。

「学史」の探究は、その学問の現在のありようを相対化する力をもつ。ここで「相対化」と言っているのは、ある知識や情報の「絶対化」あるいは「神話化」に対抗する認識の形成であり、さしあたりは認識のありかたの複数性の承認である。もちろん、相対化は常に研究の入り口にすぎない。その用意の上に、「総体化」⁽²⁾ともいえるべき全体の再構成、すな

わち、これまで見えなかったり忘れられたりしていた、もうひとつの全体の立ち上げという作業が続く。つまり、歴史を書くということは、単なる相対化に終わってはならず、総体化として論じられてきたような全体を見わたす視野を立ち上げるところを目指す。

「歴史」は、現在の価値関心とは無縁に実在する、過去完了の完結した知識ではない。われわれが「歴史」と呼んでいる知識は、むしろわれわれが生きている現在から意味づけることで、資料という痕跡から浮かびあがらせた過去の表象である。であればこそ、その核にある現在からの意味づけのありかたが、常に問われる。歴史社会学は、まさにそうした知識の現象学的で構築主義的なありようを痛切に意識してきた。たとえば、かつての王朝は自らの権力を正当化するために滅亡した前王朝の正史を編み、あるいは社寺の縁起や諸職の由来書は、今を根拠づけるもくろみにおいて名高く価値のありそうな事績を連ねた。しかし、歴史の参照やその発掘が、現在を正統化するためだけに行われるわけでないことはいうまでもない。また記念碑の碑文がその役割を担ったように、過去の事績そのものを顕彰し、あるいは取り戻せないものとして嘆きつつ記すことが目的でもない。歴史の探究は、たとえ単純に忘れられてしまったことを知りたいという過去への好奇心から出たものであっても、差異の発見がはらむ「比較」の力によって、現状に潜む問題を明らかにできる。今漠然と信じられていることの「相対化」は、そのために役立つ。比較において生み出される気づきの力は、学問の原点である。その原点を見落としてはならないと思う。

日本民俗学史の構築が立ち向かうべき課題について考えてみたいと思ふのも、現代民俗学の現状に疑問を感じ、眼前の問題と取り組む方法に危うさと困難を感じるがゆえである。それならば「日本民俗学史」の名において、何を明らかにすべきなのか。まずは問いが共有されなければならぬ。そして明確にすべき部分をそれぞれに分担しうるならば、新

たな水準での「ユイ」や「モヤイ」が可能になるだろう。同じ志をもつ研究者が掘り起こし見通しよく整理してくれた知識や、知りたいと思いができるようになることは一つの可能性である。柳田国男が「一国民俗学⁽³⁾」という誤解されやすい用語で、切に望んでいた環境とは、あるいはそのようなものではなかったか。

② 日本民俗学史の再点検と地方民俗学史

昨年たまたまある書評誌から、最新の「日本民俗学史」である福田アジオ『日本の民俗学——「野」の学問の二〇〇年』(吉川弘文館、二〇〇九)を書評する機会をもらった(『週刊読書人』二〇〇九年二月十八日号)。福田氏の労作は、ある意味で手際よくこれまでの民俗学研究の展開を整理しているのだが、どこか基本のところまで「民俗学」という学問それ自体において自覚すべき歴史の構築と描き出しに失敗しているのではないかとというのが、最初の読後の印象だった。失礼を覚悟のうえであえて断定するならば、なにか「研究史年表」の項目を、文章としてつなげて読み上げられている感じで、時期区分にひどくこだわっている割には「学史」を貫いているであろう、研究主体の実践の全体の特質が見通せなかった。つまり何が、この民俗学の学問としての成長や発展や衰退を生み出したのか。その筋道というのか、諸契機の配置というのか、いわば構造のようなものが私などには想像しにくく、何か福田氏自身が「民俗学」という名乗りにおいてとても大事だと思っていることの中核が、説かれないままにされているという感じが残った。時期区分は、結果としての著作を整理して述べる枠組みである以上に、歴史の推進力や抑制力の理解が問われるような構造の設定だからである。

もちろん福田氏自身も満足だったのであろう、学史記述の「難しさ」

(福田二〇〇九・三〇三)を痛感し、自らが試みたその「大冒険」(同前・三〇三)について、「成功したと言う自信はない」(同前・三〇四)、「不完全・不十分な」「一つの習作」(同前・三〇五)であると述べている。どこか柳田の『明治大正史世相篇』の「自序」での措辞を思わせる謙虚な自己評価だと思うが、福田氏の「あとがき」が、いささか不親切で弱く響くのも否めない。柳田の「自序」は、理想を説くためにあえて「フォクロアとしては失敗である」(全集五・三三九)⁽⁵⁾と宣言し、「但しこの経験は少なくとも嗣いで試みる人には参考になると信じるが故に」(同前・三三七)と、なぜ失敗といわざるをえないのかに分析を進めていく。そして民俗学が目標とすべき歴史認識のありかたや、資料収集・標本調製という世相研究の方法の問題、さらには伝記式歴史への不満という記述もしくは文体の方針への解説へと踏みこんでいった。福田氏の労作では、今われわれが引き受けなければならない課題がどこに潜んでいるのか。私の短い書評では、あるいはうまく展開できなかった論点を含め、あらためてもうすこし補足説明するところから、議論を始めよう。

研究史と刊行物史

これまでの民俗学史に対する福田氏の第一の批判は、「刊行物・著作物の歴史」(二二)でしかなかったという点に向けられている。たしかに、柳田国男以外の研究者による学史としてはもともと早いものの一つである大藤時彦の「日本民俗研究小史」(一九三八)は、雑誌『郷土研究』の発刊を重視し、そこに運動としての民俗学の一つの原点を見ている。また、その後に出された『民族』や『民間伝承』という雑誌にも、学史を構成する上で、大きな役割を与えた。また関敬吾の「日本民俗学の歴史」(一九五八)は、大藤や宮本常一や和歌森太郎の学史を参考にしながら、『人類学会報告』『民俗』から『旅と伝説』『嶋』にいたるまでの雑誌の表紙を図版として掲載し、研究団体と雑誌とを前半の歴史的記述

の枠組みとした。福田氏はこのような先達たちの歴史語り的手法に対抗して、あえて高く「学史は団体組織史や雑誌刊行史ではない」「二〇〇九：三〇四」という鮮明な批判の旗を掲げる。

なるほど、団体結成や雑誌発刊を年表にまとめただけで民俗学史が終わってはならないという点で、圧倒的に正しい。しかしもしこれが「雑誌」のもつ意味や「研究団体」が果たす役割は相対的に小さく、民俗学の調査研究の内容とは別物なのであまり考えなくてもよいという誤解を生み出すのであれば、危うい。その軽視は誤った歴史認識であり、不用意な方法論であると批判せざるをえない。それは関敬吾の民俗学史の後半が、主題別問題別の概説に分解して、学史としての統一性を欠いたものとなった結果とも呼応するものだ。すでに別稿〔佐藤健二二〇〇九a〕でも論じている通り、謄写版刷のものを含めた「雑誌」は、運動としての民俗学にとって非常に重要な役割を果たした「広場」であったと私は考えている。そのようなメディアとしての印刷物が組織した力を捉えな
いまま、いかにも民俗学的な研究主題をめぐる論考や研究成果だけを、学史として論ずる。そうした視野の限定こそが、学史の記述をことさらに中央集権的で、理念的なものに止めてきたと思うからである。⁽⁶⁾

この論点は、福田氏が提出したこれまでの学史へのもうひとつの批判とも、深く関わっているように思う。福田氏の批判の第二は、これまでの学史研究は結局のところ「柳田國男中心の民俗学史」であって、「柳田國男から自立した民俗学史は見られない」という点にある。だからこそ「柳田國男を正当に位置づける努力」をないがしろにするつもりはないものの、「柳田國男以外の動向や活動、あるいは民俗への認識をも十分に組み込んだ民俗学史」〔福田二〇〇九：二〕を指すべきだ、という主張が導き出される。私も、この主張に基本的には賛成である。民俗学を複数の主体が織りなすひとつの運動としてとらえ、柳田國男が果たした組織者あるいはファシリテーターとしての大きな役割を踏まえつつ

も、それぞれの地方が展開した多様な形態を見落としてはならないと考えているからである。

しかしながら、そう発願したはずの福田氏自身が「通して読み返してみると、結局柳田國男中心の記述に陥っていることを痛感した」〔同前：三〇五〕のだから、その乗り越えはただ目指すだけ、願うだけでは足りないということになる。意図とは異なる結果になったのであれば、そこにどんな方法が足りなかったのかを考えてみる必要がある。

地方雑誌の固有性

正反対の提言に聞こえるかもしれないけれども、私は「雑誌刊行史」や「団体組織史」、あるいはさまざまな地方に生成し消滅した雑誌や研究団体の資料に、もつと学史研究は深く踏みこむべきだったのではないかと思う。

表1は、その基礎作業の一つである。学史という通常に言及される大藤時彦（一九三八、一九四二）、関敬吾（一九五三）の論考の「雑誌」の取りあげかたの偏りを明らかにするために作成した。その欠落を明確にするため、関敬吾の学史が発表されたと同じ『日本民俗学大系』の一卷『地方別調査研究』において、それぞれの地方について知る研究者が「各地方の調査研究史」〔大間知篤三一九五八：二〕を執筆している、その解説で触れられている「雑誌」を挙げてみた。それぞれの地方の研究状況の書き方は異なっていて、学史としての視座は一貫したものとはいえないけれども、表2のようにに執筆者を一覧してみると、戦後日本民俗学を支えてきた採訪者・研究者が並んでいることがわかるだろう。

そして表1と表2とを眺め渡してみると、大藤時彦と関敬吾の「学史」の言及と記述が、地方の研究者たちが支え、また地方での郷土研究を支えてきた小さな広場であった雑誌にまで届いていないことが明白になる。特異なものとして位置づけられることが多い赤松啓介の『民俗学』〔一

雑誌名	創刊	復刻	発行主体	赤松 [1938]	大藤 [1938]	大藤 [1942]	宮本 [1944]	関 [1958]	地方別 [1958]
信濃	昭和07年1月	有	信濃郷土研究会						◎
俚俗と民譚	昭和07年1月	×	中道等	◎	◎	◎	◎		
旅と郷土と	昭和07年1月	×	北斗社	◎			◎		
満州土俗資料	昭和07年2月	×	武田鋭二	◎					
郷土風景（郷土芸術）	昭和07年3月	×	郷土風景社（郷土芸術社）	◎			◎		◎
民間伝承	昭和07年3月	×	民間伝承学会（佐々木喜善）	◎	○		◎		◎
怒佐布玖呂	昭和07年4月	×	土俗同好会	◎					
ドルメン	昭和07年4月	有	岡書院（岡村千秋）	◎		◎	◎	◎	◎
兵庫県民俗資料	昭和07年5月	有	兵庫県民俗研究会（河本正義）	◎			◎		◎
播磨	昭和07年11月	×	播磨郷土研究同好会（玉岡松一郎）	◎			◎		◎
京都	昭和07年12月	×	郷土趣味社	◎					
筑後	昭和07年12月	有	筑後郷土研究会（浅野陽吉）	◎					◎
土俗研究	昭和07年	×	佐渡民俗研究会（青柳秀雄）	◎					
むさしの	昭和07年	×	武蔵野郷土会	◎			◎		
讃岐郷土研究会会報	昭和07年	×	讃岐郷土研究会						
蔭原	昭和07年	×	伊那富小学校郷土研究会	◎		◎	◎		◎
歴史と郷土（→相武研究）	昭和07年	×	神奈川県郷土研究会連盟						◎
うとう：郷土誌	昭和08年1月	有	青森郷土会（貝森格正）						◎
人情地理	昭和08年1月	×	武侯社	◎					
嶋	昭和08年5月	有	比嘉春潮	◎	◎	◎	◎	◎	◎
年中行事	昭和08年5月	有	年中行事刊行会（北野博美）	◎			◎		
口承文学	昭和08年9月	×	口承文学の会（宮本常一）	◎			◎		◎
山彦	昭和08年	×	飛騨土俗研究会	◎					
郷土玩具	昭和08年	×	建設社	◎					
いなか	昭和09年1月	×	住吉土俗研究会	◎			◎		
尾参郷土研究	昭和09年2月	×	郷土研究同好会						
加賀文化	昭和09年4月	有	加越能史談会						◎
古典風俗（民俗の風景）	昭和09年8月	×	朝日書房	◎					
山郷：伊那郷土研究	昭和09年9月	×	信濃郷土出版社				◎		◎
フォークロア	昭和09年11月	×	広島民俗同好会（丸山学）						◎
志豆波多*3	昭和09年	×	志豆波多会	◎					
祭礼と民俗	昭和09年	×	伊藤一郎	◎					
大阪民俗談話会だより	昭和09年	×	大阪民俗談話会				◎		
ひだびと	昭和10年1月	有	江馬修（飛騨考古土俗学会）	◎		◎	◎		◎
高志路	昭和10年1月	有	高志路会（小林存）	◎		◎	◎		◎
季刊民族学研究	昭和10年1月	有	日本民族学会	◎			◎	◎	◎
とほびと	昭和10年4月	×	下総郷土談話会（水野葉舟）						◎
昔話研究	昭和10年5月	有	三元社ほか（関敬吾）	◎			◎	◎	
日本民俗	昭和10年8月	×	日本民俗協会（折口信夫）	◎		◎	◎	◎	
豊前	昭和10年9月	×	小倉郷土会	◎			◎		◎
岩磐史談	昭和10年11月	×	岩磐郷土研究会（宮内富貴夫）						◎
民間伝承	昭和10年	有	民間伝承の会	◎	◎	◎	◎	◎	◎
灰	昭和10年?	×	灰発行所（太田雄治）	◎					◎
因伯民談	昭和11年1月	有	鳥取郷土会			◎	◎		◎
趣味と学問	昭和11年1月	×	文献書房（桂又三郎）						◎
近畿民俗	昭和11年2月	有	近畿民俗刊行会（澤田四郎作）			◎	◎		◎
郷土文化	昭和11年2月	×	郷土文化学会（浅田芳朗）						◎
上毛文化	昭和11年4月	有	上毛文化会						◎
高志人	昭和11年9月	×	高志人社（翁久允）	◎					◎
民謡研究	昭和11年11月	×	藤田徳太郎→白帝社			◎	◎	◎	
アチックミュージアム彙報	昭和11年4月	×	アチックミュージアム			◎	◎	◎	◎
ミネルヴァ	昭和11年	×	翰林書房（甲野勇）				◎		
防長文化	昭和12年1月	×	防長文化研究会						◎
紀州文化研究	昭和12年1月	有	紀州文化研究所（花田大五郎）						◎
越中郷土研究	昭和12年3月	有	越中郷土研究会（佐々木竜作）						◎
はやと	昭和12年4月	×	鹿児島民俗研究会				◎		◎

雑誌名	創刊	復刻	発行主体	赤松 [1938]	大藤 [1938]	大藤 [1942]	宮本 [1944]	関 [1958]	地方別 [1958]
金沢民俗談話会報	昭和12年5月	有	金沢民俗談話会(長岡博男)			○			○
アチックミュージアムノート	昭和12年5月	×	アチックミュージアム					○	
南越民俗	昭和12年7月	有	福井郷土研究会(江戸喜久治)			○	○		○
南予民俗	昭和12年	×	南予民俗研究会(山口常助)						○
民家研究	昭和12年	×	民家研究会(今和次郎)				○		
はたのとも(→伊那)	昭和12年	×	はたのとも社→伊那文化研究社						○
日本談義	昭和13年5月	×	日本談義社(荒木精之)						○
島根民俗	昭和13年9月	×	島根民俗学会(牛尾三千夫)			○	○		○
海南風	昭和13年9月	×	長崎民間習俗の会(林郁彦)						○
磯城	昭和13年10月	×	磯城郡郷土文化研究会(辻本好孝)						○
讃岐民俗	昭和13年12月	有	讃岐民俗研究会(武田明)						○
あしなな	昭和14年2月	有	山村民俗の会						○
大阪民俗談話会会報	昭和15年1月	×	大阪民俗談話会			○	○		○
瑞木	昭和15年4月	×	北方文化連盟(富木友治)						○
南島	昭和15年8月	有	南島発行所(須藤利一・金岡丈夫)						○
五湖文化	昭和15年8月	×	富士五湖地方文化協会(中村星湖)						○
民族文化	昭和15年	×	山岡吉松				○		
民俗台湾	昭和16年7月	有	金岡丈夫・池田敏雄						
郷土神奈川	昭和17年1月	×	神奈川県郷土研究会						○
九州民俗	昭和18年2月	×	九州民俗の会						○
満州民族学会会報	昭和18年	×	満州民族学会						
郷土文化	昭和21年6月	有	名古屋郷土文化会						○
いたどり	昭和21年	×	八戸郷土研究会(小井川潤次郎・静夫)						○
上毛民俗	昭和21年	×	上毛民俗の会(上野勇・今井善一郎)						○
豊橋文化	昭和21年	×	豊橋文化協会						○
うぶすな	昭和21年	×	うぶすな研究会(伊那森太郎)						○
仙台郷土研究[復刊]	昭和21年	有	仙台郷土研究会						○
三重郷土会誌	昭和22年8月	×	三重郷土会(鈴木敏雄)						○
島根民俗通信	昭和22年9月	×	島根民俗通信部(石塚尊俊)						○
しらまゆみ:郷土文化誌	昭和22年9月	×	三井神岡鉱業所労働組合文化部						○
讃岐民俗[復刊]	昭和22年11月	×	讃岐民俗研究会						○
民間伝承 兵庫篇	昭和22年	×	民間伝承の会兵庫支部(田岡香逸)						○
郷土志	昭和23年5月	×	的形村郷土志社						○
郷土研究	昭和23年6月	×	山梨郷土研究会						○
あかり(→新郷土)	昭和23年8月	×	佐賀県中央公民館→県文化館						○
岩手史学研究	昭和23年9月	有	岩手史学会(森嘉兵衛)						○
瑞垣	昭和23年12月	×	神宮司庁教導部(宇仁一彦)						○
阿波民俗	昭和24年2月	×	阿波民俗学会(多田伝三)						○
津軽民俗	昭和24年3月	×	津軽民俗の会(松木明・森山泰太郎)						○
岡山民俗	昭和24年4月	有	岡山民俗学会(土井卓治)						○
若越民俗	昭和24年8月	有	福井県民俗学会(中谷文作)						○
近畿民俗[復刊]	昭和24年10月	有	近畿民俗学会(沢田四郎作)						○
出雲民俗(→山陰民俗)	昭和24年	×	出雲民俗の会(岡義重・石塚尊俊)						○
伊賀郷土史研究	昭和24年	×	伊賀郷土研究会(沖森直三郎)						○
信濃[復刊]	昭和24年	有	信濃郷土研究会						○
鹿児島民俗	昭和25年1月	×	鹿児島民俗学会						○
奥羽史談	昭和25年1月	有	奥羽史談会(金子定一)						○
みんぞく	昭和25年2月	×	熊本民俗民族学会						○
近畿方言	昭和25年3月	×	近畿方言学会(樺垣実)						○
加能民俗	昭和25年4月	有	金沢民俗談話会(長岡博男)						○
東北民俗研究	昭和25年	×	東北民俗学会(岩崎敏夫)						○
因伯民俗	昭和25年	×	因伯民俗学会(田中新次郎)						○
郷土研究	昭和25年	×	佐賀県郷土研究会(市場直次郎)						○
ふく笛	昭和25年	×	関門民芸会(佐藤治)						○
三河郷土学会報	昭和25年	×	三河郷土学会						○
島根民俗[復刊]	昭和25年	×	島根民俗学会(牛尾三千夫)						○

雑誌名	創刊	復刻	発行主体	赤松 [1938]	大藤 [1938]	大藤 [1942]	宮本 [1944]	関 [1958]	地方別 [1958]
飛騨民俗	昭和25年	×	飛騨民俗社						○
芸備民俗	昭和25-26年頃	×	郷田洋文						○
広島民俗談話会報	昭和25-26年頃	×	広島文理大民俗談話会(河岡武春)						○
郷土豊前	昭和26年1月	×	豊前郷土文化研究会(今永正樹)						○
阿波方言	昭和26年1月	×	阿波方言学会→徳島県方言学会						○
久波奈	昭和26年8月	×	三重県立桑名高校郷土研究部						○
庄内民俗	昭和26	×	庄内民俗学会(酒井忠純)						○
辰野町資料	昭和26	×	辰野中学校						○
郷土志摩	昭和27年4月	×	志摩郷土会(鈴木敏雄)						○
伊勢民俗	昭和27年4月	有	伊勢民俗学会(堀田吉雄)						○
越佐研究	昭和27年5月	有	新潟県人文研究会						○
大島文化研究	昭和27年6月	×	大島文化研究連盟(宮本常一・原安雄)						○
兵庫民俗	昭和27年6月	×	兵庫民俗学会						○
西郊文化	昭和27年9月	×	杉並区史編纂委員会→西郊文化研究会						○
芸能復興(→民俗芸能)	昭和27年	×	民俗芸能の会(本田安次)					○	
薩南民俗	昭和27年	×	指宿高等学校郷土研究部(重久重郎)						○
仏教民俗	昭和27年	×	高野山大学歴史研究会(五来重)						○
熊野文化	昭和27年	×	熊野文化社(山下幹夫)						○
鈴鹿	昭和27年	×	三重県立亀山高校郷土研究部						○
釜石郷土文化資料	昭和27年	×	土曜会(板橋武雄)						○
日本民俗学	昭和28年5月	有	日本民俗学会					○	○
はなし(大野町文化財研究会)	昭和28年5月	×	大野町公民館(十時英司)						○
防長民俗	昭和28年6月	×	防長民俗学会						○
記録	昭和28年7月	×	小倉郷土会(曾田共助)						○
山陰民俗	昭和29年2月	×	山陰民俗学会						○
民俗	昭和29年5月	有	相模民俗学会						○
郷土田川	昭和29年6月	×	田川郷土研究会						○
越飛文化	昭和29年6月	×	越飛文化研究会(米沢康)						○
兵庫史学	昭和29年8月	×	兵庫史学会(神戸大学文学部)						○
会報	昭和29年	×	高原郷土学会						○
紀州の民俗	昭和30年5月	×	紀州民俗学研究所						○
日向民俗	昭和30年	×	日向民俗学会(田中熊雄)						○
民俗手帖	昭和30年	×	山梨民俗の会						○
杵築史談	昭和31年1月	×	杵築史談会						○
飛騨春秋	昭和31年3月	有	飛騨郷土学会(桑谷正道)						○
女性と経験	昭和31年4月	×	女性民俗学研究会(瀬川清子)						○
社会と伝承	昭和31年6月	×	社会と伝承の会(原田敏明)						○
釈道空研究	昭和31年6月	×	大和道空会(水木直箭・笹谷良造)						○
若越郷土研究	昭和31年11月	×	福井県郷土誌懇談会						○
ひでばち	昭和31年	×	ひでばち民俗談話会						○
伊那路	昭和32年1月	有	上伊那郷土研究会						○
西郊民俗	昭和32年6月	有	西郊民俗談話会						○
仏教と民俗	昭和32年10月	×	仏教民俗学会(星野俊英)						○
人吉文化	昭和32年	×	人吉文化研究会(高田素次)						○
越後佐渡	?			○					
麻尼亜	?			○					
大阪土俗資料	?			○					
土の香*4	?			○					
民間信仰	?			○					

◇赤松啓介『民俗学』(三笠全書、1938)、大藤時彦『日本民俗学小史』(ひだびと、1938)、大藤時彦執筆の柳田国男『日本民俗学』『日本の学術』(1942)、宮本常一『民俗研究史』『社会経済史学の発達』(1944)、関敬吾『日本民俗学の歴史』『日本民俗学大系2』(1953)、『日本民俗学大系11 地方別調査研究』(1953)所収の各県別の記述より構成した。書誌情報に関しては、Webcatや『増補改訂 柳田文庫蔵書目録』などを参照したが、創刊の年月等に関しては現物未確認のものも多い。復刻はWebcatなどで気づいたもののみで、雑誌の全体とは限らず、一部時期のみの復刻も「有」に含まれている。

*1赤松[1938]は「和泉郷土資料」

*2赤松[1938]は「日向郷土資料」

*3赤松[1938]は「志多波多」

*4赤松[1938]には「土の香(横浜)」とあるが不明

表2 『地方別調査研究』の執筆者

地方別調査研究	執筆者
沖繩	比嘉春潮
奄美群島	山下文武
鹿児島県	村田熙
宮崎県	田中熊雄
大分県	半田康夫
熊本県	丸山学
長崎県 (長崎市付近)	伊藤一郎
長崎県 (壱岐・対馬・五島列島ほか)	井之口章次
佐賀県	野間吉夫
福岡県	野間吉夫
高知県	桂井和雄
愛媛県	森正史
香川県	武田明
徳島県	多田伝三
山口県	松岡利夫
広島県	藤原与一
岡山県	土井卓治
鳥取県	石塚尊俊
島根県	田中新次郎 蓮仏重寿
和歌山県	五来重
奈良県	笹谷良造
兵庫県	西谷勝也
大阪府	沢田四郎作
京都府	柴田実
滋賀県	橋本鉄男
三重県	堀田吉雄
愛知県	倉光設人
静岡県	郷田洋文
岐阜県 (飛騨)	江馬三枝子
岐阜県 (美濃)	佐野一彦
長野県 (北信)	箱山貴太郎
長野県 (南信)	向山雅重
山梨県	大森義憲
福井県	斎藤楓堂
石川県	長岡博男
富山県	小寺廉吉
新潟県	磯貝勇
佐渡	山本修之助
神奈川県	丸山久子
伊豆七島	坂口一雄
東京都	能田多代子 井之口章次
千葉県	川端豊彦
埼玉県	倉林正次
群馬県	今井善一郎
栃木県	青木直記
茨城県	井之口章次 荒川潤
福島県	岩崎敏夫
山形県	戸川安章
秋田県	富木友治
宮城県	竹内利美
岩手県	森口多里
青森県	森山泰太郎
北海道	高倉新一郎

九三八)や、社会経済史学会で発表されたためにあまり引用されなかつた宮本常一「民俗研究史」(一九四四)のまなざしに比べてみても、大藤や関の記述が、全国的に発行され流通した雑誌に偏っていることは明らかであった。

もちろん、地方の小さな雑誌は短命に終わったものも多く、「広場」といえるほどには維持しえなかつたものも少なくないかもしれない。しかしながら、だからといって重要な役割を果たした媒体ではなかつたと、断じてしまうことはできない。二号で力尽きてしまった雑誌であっても、その向こう側にそれを支える書き手や読み手がいたからである。そのネットワークが「かつ消え、かつ結びて」、日本民俗学史の基底を作り上げていたことも、事実なのである。そこにおける「民俗の認識」の進化や変容や振れ幅に近づこうとするならば、やはり手がかりとなる記録が残る場合は、会の活動が埋め込まれた雑誌であろう。それを共有して参照できようにするには、まずは構築すべき日本民俗学史の前提を築く。

③「年表」という技法の功罪

地方民俗雑誌への視野の問題はさておいて、福田氏の民俗学史の試み

において、理念として深く共感したのは「年表のように生起した事実を年代順に配列するだけでは学史にはならない」(福田二〇〇九:三〇三)という宣言である。まさしく、「年表」をいかに乗り越えるかは、方法の問題である。その論点こそ、民俗学が簡単にはゆずることができない方法意識の特質の一つなのであるまいか。

「年表」の乗り越えかたこそが、民俗学の方法意識の特徴ある核の一つとなりうるだろうという評価には、すこし説明が必要だろう。いうまでもなく、方法論としての民俗学が、データ処理の視覚的技術としての「年表」を排除するという意味ではない。しかしながら「歴史」と「年表」とを無意識のうち重ねてしまう歴史理解と、民俗学の歴史意識は鋭く対立するはずである。それは民俗学がとらえようとしてきた「歴史」そのものについて、解説することともなるに違いない。

たとえば『郷土誌論』(一九二二)に収められた「菅沼可児彦」の論考が挙げた、①年号にとらわれず、②固有名詞に重きを置かず、③文字以外の材料をも観察に練り入れて、④比較において探っていくもの(全集三:二二二)として設定された「歴史」は、いわば社会学的な方法ともいってよい、新しい特質をもつものだった。あるいは「優れた人格の自ら意識して為し遂げたる主要事績だけを、跡付けて居ればそれでよ

い」〔全集一七・六二七〕かのような当時の国史の英雄史観への居直りを激しく批判した「聳入考」(一九二九)における、生活制度の長期にわたる変遷への注目も、まさしく民俗学がとらえようとする「歴史」の固有の質を表現するものだった。

現代においてもしばしば誤解されているのだが、われわれが探究する「歴史」とは、「昔はこうだった」という断片的な知識に止まるものでも、「彼の人ばかり語り、かく振る舞った」という事実の蘊蓄だけを並べた物語でもない。むしろ民俗学や人類学や社会学がとらえようとする歴史は、現在の心意や行動のありように、無意識のままに作用している過去の構造である。

であればこそ、そのあまり意識したことのない拘束がどこに由来するのかが自覚的に問われ、「相対化」や「認識論的な切断」を通じて問題とされる。これまで気がつかなかった資料を参照することで、はじめて明確化するような、過去とのつながりや断絶がある。つまり、そうした関係としての「歴史」は、本質において「眼前の事実」のなかにあらわれる。

「年表」「年号」の拘束力

この発見の力を深く受け止めるためにこそ、漠然と「学史」という概念のなかで使ってしまった「歴史」の意味をもういちど確かめ、設定し直しておかなければならないと思う。私自身は、民俗学とはもうひとつの歴史学であったと考えるが、それはいかなる意味において「もうひとつの」「オルターナティブ」すなわち「これまでと異なる別の形態における」実現を主張しうるものだったのか。

ひとつには、民俗学のまなざしが「年表」「年号」が持つてしまう拘束力を批判しうるものであったことで、その有効性を正確に指摘しておかなければならない。とりわけ、日本近代の通俗的な歴史意識において、

天皇の元号を軸に区切られた時代区分は一定の強い力をもつ尺度として成り立っていた。つまり柳田国男の批判的な表現を借りるならば、まず相対化されるべきは「例えば社頭の腰掛石に日本武尊の御遺蹟を伝へたとすれば、社の神も其頃の物として」「人皇十二代景行天皇の御時」とやり「本尊は八幡太郎の護持仏などとの噂があれば、直に「天喜四年の春」と来る」「郷土誌論」全集三・二二七」というような、断片的な伝説の情報をもとに「時代」と結びつける年表還元的で年号依存的な時間意識である。それは、「歴史」を語ろうとする人びとのものの見方に、枠組みとして根強く、また古さや尊さの内容において根深く侵入していたのである。

であればこそ、さきに引用した『明治大正史世相篇』(一九三二)は、柳田自身の歴史記述の方法と文体とにおいて、冒険を試みようとした。第一に「打明けて自分の遂げざりし野望を言ふならば、実は自分は現代生活の横断面、即ち毎日我々の眼前に出ては消える事実のみに拠って、立派に歴史は書けるものだと思つて居る」(全集五・三三七)と歴史の〈現性〉あるいは〈現前性〉を強調し、第二に「在来の伝記式歴史に不満である結果、故意に固有名詞を一つでも掲げまいとした」(同上・三三九)といふ切ること、「一回性」に還元されない〈構造〉に焦点をあてた特異な文体の意義を宣揚した。それは、南方熊楠の批判に対する反批判でもあった『郷土誌論』や、当時の歴史学への対抗を強く意識した「聳入考」の方法意識の延長上での、当然の主張だったのである。

しかしながら、いわずもがなの注釈ではあるが、この柳田の「歴史」のとらえ方は、固有名詞で組み立てられた過去の物語としての従来の歴史と、必ずしも二律背反的で排他的に対立するものではない。すなわち、柳田の「伝記式歴史」批判のポイントは固有名詞の羅列と連接とに惑わされて、因果の〈構造〉の認識を怠つてはいけないという忠告であつて、固有名詞の力をまったく禁じる極端な一般化志向の宣言と受け止めるべ

きではない。⁽¹⁾

このように考えてみると、われわれは民俗学史における「歴史」がどのようなものかについて、すこし拮げた考えかたを用意することができ。すなわち、過去にこのような研究があり、固有名詞で語られる偉大なあるいは特異な研究者によって、かくも先駆的になされたという蘊蓄の物語ではない。むしろ、今日において当然とされる、民俗のとらえ方や語り方が、どのような時期と場において芽吹き、人びとのどのような実践に媒介されて生まれたのかを、説明するものでなければならぬ。

一覧の技術としての可能性

もちろん年表がもちうる力も大きい。そこも正当に評価しておかなければ、公平ではない。いわずもがなの蛇足になるが、すこしおつきあい頂きたい。

「年表」もその本質は、統計的処理における「単純集計表」「クロス表」と同じ、データ処理の空間的な技術である。まずは断片として現れ、ときに相互に矛盾することすらある「記録」や「記憶」の情報を整理し、空間に配置して一覧することを可能にする。と同時に、そこにおいて見えてくる関係を発見し、不整合や矛盾を批判する、方法であり技術である。私自身が、年表の方法の恩恵を意識し、その力を存分に利用させてもらってきた。表1の基本も、雑誌を創刊年で並べてみた年表である。技法として見るならば、年表を含む「表」の作成は、ものごと、できごととの整理において、初歩的だが基本的に不可欠の作業でもある。

ここでは、この共同研究のテーマとも関わる、私自身の別な経験を例にとつて、その効力を実感したことに触れておこう。

二〇〇六年の一月に、まったく思いがけない縁が重なって、「糸魚川郷土研究会」という人たちを中心とした聴衆を相手に、話をしなければならぬ羽目になった。⁽²⁾ 急遽「郷土研究の誕生」という題名で、柳田

国男の『郷土生活の研究法』の方法論的解釈と、せっかくなので糸魚川の郷土研究の展開をからめて話題にすることにした。しかし柳田国男の方法論はともかく、糸魚川や新潟県での民俗学については何も知らず、手もとにあった松本三喜夫『野の手帖』(一九九六)の青木重孝論と、矢野敬一(二〇〇四)論文が扱っている『高志路』周辺の民俗研究の情報とを手がかりに、伊藤純郎の郷土教育運動の調査などを補って、ビジネスホテルで夜なべして簡単な「年表」を作成して、とりあえずの配布資料とした。そのていどの準備しかできなかったのはまったく申し訳なかつたが、にわか勉強ながら集まってきたことを年表の形に配置することで私自身には見えてきたものも多かつた。表3は、その当日の資料にすこし手を入れたものである。

それぞれの地方の固有性と普遍性

この年表をつくるなかで、すこし考えた「日本民俗学史」の論点について、二点だけメモしておこう。

第一は、それぞれの地域における「民俗学」の、いわば着床の仕方が異なることである。こうした地方民俗学史の特質を、日本民俗学史がいかに取り入れられるかは、やはり一つの課題である。

なるほど、昭和初年の「郷土教育」の運動は、さまざまな意味で「郷土研究」の追い風となったことは間違いなく、地方地方で作成された各種の「郷土読本」に関わった民俗の学究も少なくなかつた。その時期の盛り上がり、昭和一〇年の柳田国男の還暦記念民俗学講習会とも重なり、雑誌『民間伝承』の発行ともつながっていくために、ここがひとつの画期的ように見えてしまうのは無理もない状況である。実際に、越後の民俗学あるいは郷土研究を考えてみても、小林存と青木重孝とが民俗学講習会に出席して、そこで出会ったことは意義深く、『高志路』の発刊も重なって、ある活性化の様相が観察できる。

表3 糸魚川での郷土研究

	糸魚川を中心に	新潟県の他の地域の動き
明治13(1880)		温故談話会の結成 「越の国に於ける神社仏閣古城跡古俚歌物産及び土地の沿革を探究するの目的を以て」『温故乃栞』第36号
明治23~26 (1890~93)		『温故乃栞』の発行、1-36号 [長岡]
明治39(1906)		北魚沼郡教育会編『北魚沼郡志』巻之1、2刊行。
明治43(1910)	郷土研究会(後の「西頸城郡郷土研究会」)の結成。糸魚川尋常小学校校長だった花井平蔵の呼びかけ。「近隣の十の小学校と糸魚川中学校、糸魚川女子職業学校、さらには町の有力者をも加えて発会した。組織的には、地理歴史部と理科部の二部から構成されていた」〔松本三喜夫 1996:176〕	
大正2(1913)	○柳田国男・高木敏雄の雑誌『郷土研究』が発刊される。	
大正4(1915)		西蒲原郡教育会編『西蒲原郡誌』中編、下編刊行。
大正5(1916)	相馬御風、糸魚川に帰郷。大正9年頃から考古学に関心を示し、遺跡の発掘や寺社の考証のために地域の各地を歩き、郷土資料の収集も行った。雑誌『野を歩む者』の発行。	
大正7(1918)		西蒲原郡教育会編『西蒲原郡誌』上編刊行。
大正8(1919)	西頸城郡郷土研究会において、会則が作られる。郡長と相馬御風が名誉会長、郡視学を副会長とする。地域資料「西頸城郡郷土史料」等の発行。『明治天皇北陸巡幸記』もその一つ。	
大正9(1920)		中魚沼郡教育会編『中魚沼郡誌』刊行。 南魚沼郡教育会編『南魚沼郡誌』刊行。
大正10(1921)	西頸城郡史料展覧会。相馬御風が発起人となって所蔵史料を糸魚川高等女学校で展観。 青木重孝、糸魚川中学校を出て代用教員となる。	
大正11(1922)	○柳田国男『郷土誌論』刊行。	
大正14(1925)	○文部省予算に「教育改善及農村振興基金」を財源とする「師範教育費補助」が計上される。郷土教育運動の財源となる。	
		高橋義彦(中蒲原郡大形村)が『越佐史料』の刊行を始める。
昭和3(1928)	青木重孝、正教員の免許を得て、青海小学校に戻る。 ○柳田国男『青年と学問』刊行(再版1931で『郷土研究十講』と改題)。	
昭和5(1930)	5月、信濃教育会による『北安曇郡郷土誌稿 第一冊 口碑伝説篇』が刊行される。「西頸城郡郷土誌稿」の一つの手本となる。 ○11月、郷土教育聯盟から雑誌『郷土』(後に『郷土科学』『郷土教育』となる)が発行される。 ○12月、文部省が師範学校への「郷土研究施設費」の交付。 西頸城郡郷土研究会会員の山崎甚一郎が、青海小学校の校長として赴任する。 『西頸城郡誌』の刊行。西頸城郡郷土研究会が、郡教育会と協力して作成。	
昭和6(1931)	○1月、文部省が師範学校規程に「地方研究」を導入。「地方研究を課して地方の風土に関する沿革及び情勢を理解せしめ且つ教授法を授くべし」。 青木重孝、青海小学校で『学校時報』を担当、「埋草みたいなかつこう」で郷土資料を取りあげ、郷土雑話を連載する。	

	糸魚川を中心に	新潟県の他の地域の動き
昭和9(1934)		9月、高志路会の結成。
	○柳田国男著『民間伝承論』刊行。	
昭和10(1935)		1月、雑誌『高志路』発刊。
	青木重孝はこの頃、山崎甚一郎から郷土研究会の事業として、郡の口碑伝説集を作れと言われ、相馬御風に指示を仰ぐと柳田の民俗学講習会を紹介される。	
	○7月31日～8月6日、柳田国男の還暦を記念した民俗学講習会が開催される。新潟県からは、小林存と青木重孝が出席。「民間伝承の会」が結成される。	
	○柳田国男著『郷土生活の研究法』刊行。	
	10月、青木重孝が佐渡の河原田高等女学校へ異動。佐渡で民俗学を研究。	
昭和11(1936)	7月5日、糸魚川小学校で柳田国男の講演「一人前と十人並」。西頸城郡郷土研究会の主催で、同郡の教員多数が参加。	7月6日、新潟で高志路会の会員と座談会。市内の学校関係者など約45名が参加。この後、柳田は佐渡にわたり、中山徳太郎ら佐渡の研究者と座談会を行ったり、青木の河原田高等女学校で「妹の力」と題する講演を行っている。
		10月、『高志路』に柳田国男が「越佐偶記」を寄せる。
	10月、『西頸城郡郷土誌稿(一)』(西頸城郡教育会)刊行。	
昭和12(1937)		5月、長谷川正が参加して小国郷教員協議会編『小国郷土誌』(中里尋常高等小学校)が刊行される。
	11月、『西頸城郡郷土誌稿(二)』(西頸城郡教育会)刊行。	
	この年に、郷土研究会の会員によって年中行事の調査が行われる。	
昭和13(1938)		7月、小林存が中心になって編集した『郷土研究入門手帳』が刊行される。
		8月、小国郷教員協議会編『小国郷土史』(小国教員協議会)が刊行される。
	9月、中山徳太郎・青木重孝『佐渡年中行事』刊行。柳田国男の序文。佐渡の小学校教師を中心とした国語研究会。「中山徳太郎が主として資金を提供し、青木重孝が資料採集と編集にあたった中心的に実務的な労をとった」[松本 1966:196]	
		10月16日・17日 高志社主催、県教育会協賛「郷土研究講習会」を新潟師範学校郷土教室において、金田一京助と最上孝敬を講師に開催。渋沢敬三、岩倉市郎も参加。
昭和14(1939)		『高志路』創刊五周年記念「郷土研究講習会」の開催、橋浦泰雄を講師に迎える。
昭和16(1941)	11月、『西頸城郡年中行事 西頸城郡郷土誌稿(三)』(郷土研究会)刊行。	

松本三喜夫『野の手帳』(青弓社、1996) 伊藤純郎『郷土教育運動の研究』(思文閣出版、1998)、矢野敬一「郷土誌・史編纂と「民間伝承」へのまなざし」『柳田国男研究』(第3号、柳田国男の会、2004)、青木菁児編『青木重孝遺作集』(私刊、1995)等から構成。

しかしながら、たとえば糸魚川において相馬御風が果たしてきた役割が、固有の土台としてあったことも、表から読みとれる事実である。明治一三年に結成されたという「温古談話会」が三年ばかり続けた雑誌『温古乃葉』を復刻し、「西頸城郡郷土史料」の発行や展覧会などを行ったことや、おびただしい数の校歌を作詞することを通じて郷土意識の涵養に貢献したことなど、相馬御風の注目すべき活動は多いが、その郷土研究に対する考えかたは柳田国男のそれとはすこし理路と位相とを異にしているように思う。たとえば資料一の相馬御風「郷土生活の話」は、柳田もまた講師として登場したことがある日本青年館の「青年カード」という通信教育教材である。ここで議論されている「郷土」は、観察の対象というよりも、価値の源泉であり観念的な理想である点で、柳田が掲げた民俗学の郷土研究とは異なる。にもかかわらず、こうした相馬御風のような存在や、それが占めた位置もまた、この地の郷土研究の展開のなかで描き直されるべき主題だと思ふのである。

また、山村や海村の調査のために作られた『郷土生活採集手帖』を明らかに踏襲したと矢野敬一が論ずる「矢野二〇〇四・二六」高志路会の『郷土研究入門手帖』（一九三八）も、実際に探し出して手にとってみると、まだ論ずるべき多くの点が残されている。書冊の大きさなどの機能の違いは、印象の問題でもあろうからあえて立ち止まらないうとしても、資料二にあげた「百項目」の内容を構成する主題の設定や概念の並べ方は、すでに資料三の『採集手帖』（一九三七）の目次がその用語の並びで表現している生活の見方とは相当に異なっている。⁽¹⁴⁾たとえば、高志路会の手帳では「年中行事」や「民間信仰」といった概念が複数の項目をまとめるものとして現れてきて目立つ。これに対して、郷土研究社の手帳は「笑ひ」や「慎しみ」、「仲良い村・悪い村」「仕合わせな家」と主観や感覚の内側まで探ろうとしている。村の「大事件」への注目の順番の大きな違いなども、たぶん偶然ではない。果たして民俗のとらえ方そのもの

において「踏襲」と論じられるかどうかを改めて検討してみなければならぬ。

小さな「全集」の意義

第二に、年表をつくりながら不自由に感じたのは、項目化しうるような情報の不足であり、年代の配置が難しいような情報の扱いである。その地での研究を実際に担ってきた人々からの「聞き書き」も含めて、年表の内と外とを充実させていくことなしに、おそらく民俗学史の基礎資料を収集するプロセスは進まない。しかしながら、情報が増え資料の範囲が拡大していくにつれて、その知識は年表という形式には収まりきらない部分が増え、結局のところこの形式を踏み越えていかざるをえなくなる。

もちろん、書かれたものの世界は漠然と考えている以上に広大である。情けないことに、糸魚川で話をする前には青木重孝の名前くらいは『退読書歴』に再録された『佐渡年中行事』の序文を通じて知ってはいたものの、たとえばその数多い論考を組織的に追ってみたことがない。ご自身の研究回顧の文章を含む『青木重孝遺作集』も講演準備の段階では手に取ってはいなかった。現地での研究者との交流のなかで、中心人物であった青木の重要性に遅ればせながら気づいて、すこし注意して見ると、新潟県公文書館には、柳田国男の還暦記念講習会に新潟県から参加したもう一人の郷土研究者である小林存（みづらう）の蔵書や、新潟県で活躍した別の郷土研究家の蔵書類も入っていたりした。そのなかに青木重孝のご子息（青木青児氏）がまとめた著作の私家版がかなり寄贈されていて、たまたま瞥見できた遺作集の一冊だけですこしわかったような気になっていたことを恥じた。

地方で活躍した民俗学者の著作を、まずは目録として、できるならば著作それ自体が、できるかぎり見えるようにすることは意味がある。そ

33 青年力年

相馬御風 郷土生活の話

編者 相馬御風

1 郷土はわれわれに、かくほどまでに魅力があるのは何故ですか。
 2 郷土生活の特色は何ですか。
 3 幾城にならば郷土生活の弊害はどうなるでしょう。
 4 わが國の郷土生活は即國家生活である點をおおせ下さい。
 5 「郷土を愛する心」なしに、いかにわれわれの生活が豊かであるか。

左の問題を考へ下さい

編者 相馬御風

大日本青年會聯合會

郷土生活の特質

郷土生活は大地に即した生活である。土を離れて郷土生活はあり得ない。定つた地域に自然の恩恵を受け、多くの人が水いり、共同生活を営んで来た。その共同生活が、郷土生活の特色である。郷土生活は、自然の恩恵を受け、多くの人が水いり、共同生活を営んで来た。その共同生活が、郷土生活の特色である。

郷土生活の特質

郷土生活は大地に即した生活である。土を離れて郷土生活はあり得ない。定つた地域に自然の恩恵を受け、多くの人が水いり、共同生活を営んで来た。その共同生活が、郷土生活の特色である。



この郷土への愛は、決して私利私欲の心を動かさず、郷土の発展と幸福を願ふものである。郷土の人心を惹きつける魅力は、實に此の郷土に在り、ひたすらしやうのない、この郷土に在り。それは自然の恩恵を受け、多くの人が水いり、共同生活を営んで来た。その共同生活が、郷土生活の特色である。

郷土生活の特質

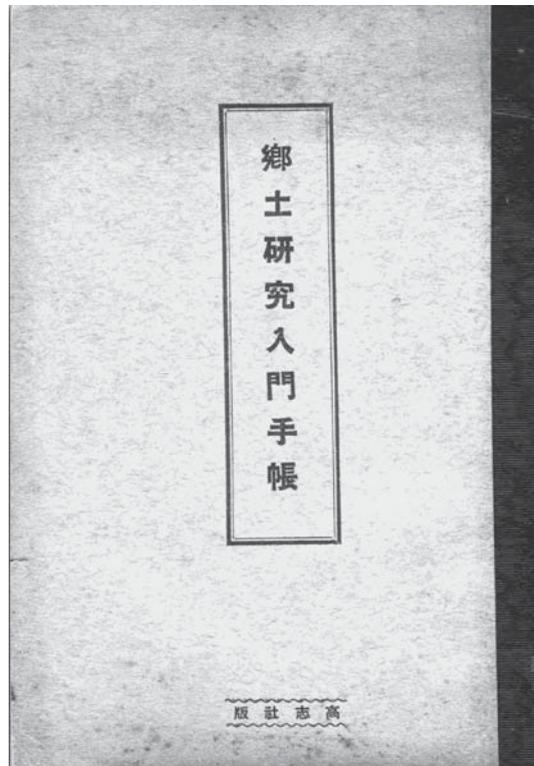
郷土生活は大地に即した生活である。土を離れて郷土生活はあり得ない。定つた地域に自然の恩恵を受け、多くの人が水いり、共同生活を営んで来た。その共同生活が、郷土生活の特色である。

郷土の魅力

郷土の魅力は、自然の恩恵を受け、多くの人が水いり、共同生活を営んで来た。その共同生活が、郷土生活の特色である。



資料1-1 相馬御風「郷土生活の話」『青年力年』



資料2-1 高志路版『郷土研究入門手帳』

<p>(1) 類型 (2) 起源の一(自然的要因) (3) 起源の二(人為的要因) (4) 興廢 (5) 場所の區劃 (6) 部落と家 (7) 家族制度 (8) 本家と分家 (9) 規方子方 (10) 部落民の權利義務 (11) 部落民の出入 (12) 行政事情 (13) 産業系統 (14) 交通關係</p> <p>(15) 飲料水・使用水と灌溉水 (16) 部落の中心勢力 (17) 信仰の傳統 (18) 年中行事の一(新年) (19) 年中行事の二(小正月) (20) 年中行事の三(二月三日) (21) 年中行事の四(四月五月) (22) 年中行事の五(六月七月) (23) 年中行事の六(八月九月) (24) 年中行事の七(十月十一月) (25) 年中行事の八(十二月)</p> <p>(26) 産業層 (27) 産業神 (28) 住居</p> <p>(29) 衣服 (30) 食物 (31) 食制 (32) 祭禮 (33) 出産 (34) 婚姻 (35) 婚姻の考察 (36) 葬式の一(内部の作法) (37) 葬式の二(野での作法) (38) 墓制 (39) 年忌日 (40) 若者組 (41) 若者組の試練 (42) 娘仲間 (43) 部落内の相互扶助 (44) 部落の協力作業 (45) 生産物の配當 (46) 私財産 (47) 家々の標識</p> <p>(48) 占有を許さざる場合 (49) 部落の制裁 (50) 主婦と子供 (51) 年齢感覚 (52) 自治自足 (53) 市 (54) 文化の傳播者 (55) 部落の誇り鳥 (56) 特殊階級といふやうなもの (57) 部落の偉人功勞者 (58) 部落の大事件 (59) 住民の労働振り (60) 休日 (61) 交際 (62) 慶宴 (63) 民間信仰の一(本体のある神) (64) 民間信仰の二(自然現象崇拜)</p> <p>(65) 民間信仰の三(陰陽崇拜) (66) 民間信仰の四(神物崇拜) (67) 民間信仰の五(呪物崇拜) (68) 妖怪變化 (69) 信仰に關するマップ (70) 生活に關するマップ (71) 一般的俗信 (72) 民間信仰の上に生活する階級 (73) 部落ではどんな自然物が注意されるか (74) 自然勝 (75) 傳説 (76) 昔話 (77) 世間話 (78) 民謡 (79) 部落の娯樂 (80) 前項の傳承者の生活 (81) 方言</p> <p>(82) 子供の遊び (83) 郷土玩具 (84) 民間のこと (85) 習俗者の團體 (86) その他山での生活 (87) 漁業者の團體 (88) 鰯 (89) その他海での生活 (90) 淡水漁業 (91) その他川での生活 (92) 舟 (93) 漁の習俗 (94) 山言葉と沖詞 (95) 特殊産業に就いて (96) 工場のある地方のこと (97) 雪のある地方のこと (98) 雪の一(雪中生活) (99) 雪の利害 (100) 結び 以上</p>	<p>目次</p>
--	-----------

資料2-2 高志路版『郷土研究入門手帳』目次

次 目

- 一 仲良しい村・悪い村
 - 二 売り出した物
 - 三 買ひ物の場所
 - 四 運搬方法
 - 五 文化を齎す者
 - 六 出稼ぎ・遠方用漁
 - 七 旅と送迎
 - 八 村内の組
 - 九 隣家交際
 - 十 毛講・日待
 - 十一 ユヒ・モヤヒ
 - 十二 元手傳ひ・合力
 - 十三 災難時の互助
 - 十四 三村制裁
 - 十五 村の公と私
 - 十六 漁師の格式
 - 十七 占有的標識
-
- 一 枕飯・分れ飯・香爨
 - 二 垂死忌
 - 三 斎祭の種類
 - 四 斎先祖祭り
 - 五 小屋・屋敷神
 - 六 毛間取り・キロリ
 - 七 天家の出入口
 - 八 仕事上の服装
 - 九 奇晴の服装
 - 十 空特殊食物
 - 十一 空食物贈答
 - 十二 空初漁祝
 - 十三 空大漁祝
 - 十四 空舟造り・舟下し
 - 十五 空舟の種類
 - 十六 空操舟作法
-
- 一 供養る場所
 - 二 祭具の棄て場
 - 三 祭神罰・通り神
 - 四 祭神事と女性
 - 五 空夢の御告・前兆
 - 六 ト占
 - 七 空妖怪変化
 - 八 空病不幸の呪願
 - 九 空祈願の唱へ言
 - 十 空神佛の助け
 - 十一 空共同祈願
 - 十二 空道切り
 - 十三 空浄めの鹽
 - 十四 空死期の豫知
 - 十五 空仕合せな家

次 目

- 一 一村の起り
 - 二 功勞者
 - 三 大事件
 - 四 村の盛衰
 - 五 家の盛衰
 - 六 亡んだ職業・夜業
 - 七 古い漁法
 - 八 漁撈組の組織
 - 九 網子舟子の契約法
 - 十 漁撈仲間の役割
 - 十一 網株・舟株
 - 十二 漁場定め
 - 十三 三口明け
 - 十四 漁獲物分配
 - 十五 入漁者
 - 十六 他村からの傭人
 - 十七 定住の手續
-
- 一 晝相續
 - 二 晝隠居と分家
 - 三 晝同族交際・同族神
 - 四 晝假の親子
 - 五 晝異常人物
 - 六 晝笑ひ
 - 七 晝成年式
 - 八 晝若者組・宿
 - 九 晝娘仲間・宿
 - 十 晝嫁入・初聲入
 - 十一 晝遠方縁組
 - 十二 晝産屋・産の忌
 - 十三 晝初宮詣・幼児葬送
 - 十四 晝子供組
 - 十五 晝主結構・女の私財
 - 十六 晝年祝
 - 十七 晝同齡習俗
-
- 一 晝信號
 - 二 晝酒宴の席順
 - 三 晝正月祝
 - 四 晝盆行事
 - 五 晝氏神参りの騎村
 - 六 晝神供と頭屋
 - 七 晝神社と舊家
 - 八 晝官座
 - 九 晝神に祀られた人
 - 十 晝漁の神・海の神
 - 十一 晝船靈
 - 十二 晝漂着神
 - 十三 晝流れ佛
 - 十四 晝祭前の慎しみ
 - 十五 晝動物禁忌
 - 十六 晝船上禁忌・沖言葉
 - 十七 晝一般禁忌

資料3 郷土研究社版『採集手帖(沿海地方用)』目次

表4 青木菁児編「青木重孝著作集」リスト

1 『青木重孝遺作集』	1995年3月31日発行	240頁
2 『青木重孝郷愁「佐渡」Ⅰ』	1996年3月1日発行	296頁
3 『青木重孝郷愁「佐渡」Ⅱ』	1996年7月20日発行	298頁
4 『青木重孝郷愁「佐渡」Ⅲ』	1996年11月30日発行	298頁
5 『青木重孝郷愁「佐渡」Ⅳ』	1997年3月30日発行	294頁
6 『青木重孝懐古「越後糸西」Ⅰ』	1997年11月20日発行	298頁
7 『青木重孝懐古「越後糸西」Ⅱ』	1998年6月1日発行	299頁
8 『青木重孝懐古「越後糸西」Ⅲ』	1999年3月1日発行	298頁
9 『青木重孝古里「文化財訪問」上』	2000年2月20日発行	298頁
10 『青木重孝古里「文化財訪問」下』	2001年4月10日発行	300頁
11 『青木重孝「講座テキスト」など』	2003年10月1日発行	304頁
12 『青木重孝懐想「学校時報」など』	2005年3月15日発行	300頁
13 『青木重孝越後「市振の関」など』	2009年7月1日発行	300頁

これは簡単な伝記や生涯の紹介とか、主要な業績に限定して評価する以上に、基礎的で重要なことだと感じた。青木青児氏がこの十数年をかけて、いわば私家版の「青木重孝著作集」（現在、一五冊まで刊行している。表4参照）を積み上げておられるのは、まことに価値のある仕事である。とりわけ、地方の工場の社内印刷物（電気化学工業株式会社の『工場報知』や『工場ニュース』など）や、学校や町の配布物（『学校時報』『広報おうみ』『広報いといがわ』など）に連載した論考を収録しているのは、遠く離れていて閲覧の手立てに乏しい読者としてじつにありがたい。その失われやすい掲載雑誌の収集は、郷土においても発掘に大変なご苦労があったと思うが、そこに住み暮らしてきた編者であればこそ、さまざまな情報のネットワークを通して可能であったのだと考える。学史のまなざしとして考えるとき、さらに忘れてはならないのは、地方の民俗学者に採集成果や論考の発表の場を持続的に提供してきたのは、地方新聞の文化欄などを含めた、限られた範囲での、いわば「小さなメディア」であったという事実である。その意味で、その地方にいかなる発表や交流の場が用意されていたか。それらを踏まえた民俗学史が書かれねばならない。

④ 郷土での民俗学史のために…主体と場の交錯をたどる

糸魚川で得た小さな示唆は、ひとりその郷土での必要や課題だけに止まらないように思えた。

一般に、地方の現地では民俗学の歴史もまた忘れられ、ご遺族の代替わりによって資料もまた散逸する危険性に直面している現状がある。そうした実態は、柳田国男全集の編集作業との関連で鳥取を訪ねて郷土の研究者と交流したときにも、また「岡山民俗」の周辺を取材した時にも思ったし、重信幸彦と一緒に小倉郷土会の末裔を訪ねたときにも感じた。

ある意味で、全国に遍在している現実である。郷土研究は中央から見えないだけでなく、地方においても埋もれている。だからこそ、民俗学史の構築というのは、発掘者の構えが問われる、相当な力業なのだということを感じなければならぬ。

もちろん、「ローマは一日にして成らず」だと思ふ。

そしてまずは、小さな便利が必要である。きっかけは色々だろうが、興味を感じてちよつと調べてみようと思う人に、先人の研究実践の手がかりを提供する仕組みがあったほうがいい。あるいはいまだ正確な測量図のない迷宮かもしれない「民俗学」の文庫に誘う仕組みの共有において、国立歴史民俗博物館のような機構が果たす役割も大きいだろう。

著作目録は、その本場に最初の第一歩である。私刊本作りに熱心で比較的資料が残っていると思われる沢田四郎作にしても、たとえば追悼出版の『澤田四郎博士記念文集』（一九七二）は、その頁の三分の二以上が「論叢」という論文集で、肝心の沢田の著作活動については、編著書が「他十数篇」、論文が「他四百数十篇」という不明確な記述に止まっている。むしろ一九六七（昭和四二）年に澤田自身が自らの記念としてまとめた『五倍子執筆目録』を、自伝的なメモを含めそのまま収録して、広く残すべきではなかったかとも思う。民俗学のなかであり論じられることがないが、本山桂川の特徴ある活動について、『市川市歴史博物館年報』に小泉みち子が遺族の協力のもとで詳細な文献目録をまとめているが、これはその後どう発展したのだろうか。小島勝治については、友人の努力もあって単なる著作目録を越えて、主要な著作を取り込んだ著作集ともいべき集積がまとまったもの⁽¹⁶⁾の、同じく戦死した太田陸郎については、まだ位置づけられないままに埋もれている⁽¹⁷⁾。あの民俗講習会に参加した人たちについても、それぞれにそれまでの活動とその後展開について、その研究がいかなるものであったのかを、『日本民俗学研究』（一九三五）の記述を手がかりにひとつひとつ位置づけてみる

必要はあるのではないか。すでに編まれたものを集めるだけでも、だいぶ見え方が変わる。柳田国男や折口信夫や南方熊楠などの「巨人」に限られ、宮本常一や桜田勝徳や瀬川清子等々の次世代の何人かの「スター」を中心に語られてしまう歴史は、そうした無数の研究グループや絡み合うネットワークによって、具体的に相対化されるはずである。

であればこそ、「ローマは一日にしてならず」でありながら、たどり方を間違えさえしなければ、「すべての道はローマに通じる」のである。

たしかに柳田国男という卓越した思想家の影響は、「日本民俗学史」にとって本質的といっているほどに大きい。むやみにすべてをそこに還元することはできず、さしあたり「いくつもの民俗学史」といつておいた方がよい固有性と複数性がありそうに思う。それゆえ「総体化」という理想のためには、研究主体の実践を丹念にたどるとともに、場として作用したものの構造を想像力豊かに描きだす必要がある。

「場」としての民俗学

たとえば、昭和初年の「郷土教育」の展開は、柳田国男が選んだ批判的な関与の微妙な位置を含めて、「民俗学」の形成に大きな意味をもつたと思うが、ここで「学校」という装置が果たした役割は、日本民俗学史でどれだけ論じられているだろうか。

なるほど、一般的な意味で基盤となったのは小学校、中学校の教師たちであったことはすでに指摘されている。また「郷土教育」運動の全体については、伊藤純郎や小国喜弘の研究が明らかにしてくれている側面も大きい。たとえばそれぞれの地域で編纂された『郷土読本』にしても、内容の比較に踏み込んだ分析がなされてよいのではない。民俗学史がほんとうに現代においてアクチュアリティをもつかどうかは、このような研究の「場」の個性にどれだけ迫りうるかにもかかっている。地方で活躍した一人のユニークで個人的な民俗学者に焦点をあて、その研

究上の生涯を発掘する没入も面白く、忘れられたものを掘り起こすうえでは必要である。しかしそこにおける民俗研究をある「運動」として把握するためには、「日本民俗学」の展開を見わたすマクロな民俗学史と、視野を「郷土」に限ったミクロな民俗学史とをつなぐ、「場」の把握と分析とが不可欠だと思う。

研究会や談話会への注目も、日本民俗学史研究の重要な現場となるだろう。これもまた歩み始めの一步にすぎないが、柳田国男の会での報告のために準備した大阪民俗談話会の記録(表5)は、そのつもりもあって作成した⁽¹⁸⁾。いまだ「年表」でしかないけれども、そうした場の把握と分析を始めるための実験的な基礎作業である。大阪民俗談話会は、手がかかりとなる記録の多い事例だと思ふ。記録者として飛び抜けた能力と情熱をもつ宮本常一の個性も深く関わり、澤田四郎作の本づくりの熱心さとの共鳴も作用したのであろう。しかし、これにしても宮本常一の「大阪民俗談話会だより」や「大阪民俗談話会記録」「大阪支部報」などの謄写版での記録は、その成立プロセスが必ずしも単純ではないため、もうすこし丹念な検討も必要である。

固有の生活史を有する郷土の研究者たちの、個性に迫るような研究が一方では必要であることは否定しない。しかしながら、「民俗学」のフィールドワークの可能性が、「自分の調査地(フィールド)」や「我が村」の事例の羅列に閉じて孤立してしまつた過ちを、もういちど「個人」「個性」への没入という行き止まりとして、繰り返しわけにはいかない。個人的な民俗学研究者へのまなざしを、現代への問いとしての「民俗学史」に結びつけ、私のことばで表現するならば「運動としての民俗学」や「方法としての民俗学」の特質を明らかにするために活かす。そのためには、そのような複数の民俗学への興味が交差する「場」の分析が不可欠となる。研究会や雑誌をひとつの「広場」としてとらえ、そこで繰り返し広げら

表5 大阪民俗談話会の記録

年	月日	談話会同人関連の記事				
大正15	4月	澤田四郎作: 柳田国男から葉書をもらう。個人雑誌を送ったのに対する返事。講演会に参加する。				
大正12		笹谷良造: 國學院の学生として、郷土研究会に所属し、柳田の帰朝報告を聴く。				
昭和2	11月20日	澤田四郎作: 柳田国男を砧村の書齋に訪問する。				
昭和5	9月	宮本常一: 祖父や母から聞いていた昔話をまとめて『旅と伝説』に送る。柳田から手紙。				
昭和6	1月	澤田四郎作: 柳田をたずね『ふるさと』の序文をお願いする。「母子草」を書いてくれる。				
	6月	澤田四郎作: 大阪に帰り、小児科医を開業する。				
		岸田定雄: 広島高等師範の学生のときに、広島方言学会に来た柳田国男の講演を聴く。				
昭和7		高谷重夫: 姫路高等学校二年生の時で、柳田が講演。のち京都大学でも集中講義を聴く。				
昭和8		宮本常一: 小谷方明らと和泉郷土会談話会を始める。9月 謄写版の『口承文学』を出す。				
昭和9	1月	横井照秀: 住吉土俗研究会より、『いなか』(のち『田舎』)という土俗雑誌を刊行する。				
	9月27日	澤田四郎作: 柳田国男から電話。講演会。そのあとに民俗学の同志を紹介する。				
	9月28日	宮本常一: 京都大学の講義に来た柳田から連絡、宿を訪ね話を聞く。大阪の同志がいることを知る。				
年	月日	名称	参加者	場所	内容	典拠
	11月11日	1回 大阪民俗談話会	8名	浜寺公園海の家	昔話、石垣、一夜妻、陰茎習俗、洗い髪と山の神、草履、菓子、雇人制度、サンカ、旅、喜界島、性習俗など	旅と伝説85
	12月16日	2回 大阪民俗談話会	16名	澤田宅	和泉石津の火渡神事、焚き火の習俗、漁業権、凶事予報、住まいと信仰、覗き眼鏡、サンカ、数に関する言い習わし、つきものなど	五倍子雑筆3、旅と伝説86
昭和10	1月27日	3回 大阪民俗談話会	17名	澤田宅	桜田勝徳「大隅の正月行事」、門松、食べ物、歳徳神、エイコノ節、オネッコ、正月の挨拶、カンダテ祝、民俗雑事、南方先生のことなど	五倍子雑筆3、旅と伝説87
	2月24日	4回 大阪民俗談話会	13名	澤田宅	喜界島、狐つき、巫女寄せ、播磨小河(オーゴ)、死の予報、火の玉、狐火、唐土の火事を消す、奇怪な話、寒天小屋、山の神など	五倍子雑筆3、旅と伝説89
	3月31日	5回 大阪民俗談話会	10名	澤田宅	泉州に於ける紀州出稼人(小谷)、お多賀さん、座の制度、米つき部屋(杉浦)、ワタクシ、手拭いの民俗、新参者いじめ、制裁、ノージ、奉公人分家	五倍子雑筆3、大阪民俗談話会記録
	4月14日	6回 大阪民俗談話会	15名	澤田宅	淡沢敬三出席。和泉の頼母子(小谷)、徳川時代の幣制(藪)、喜界島の葬制(岩倉)、河内丹比の相互扶助(杉浦)、よそ者に対する待遇、和泉葛畑の相互扶助(山口)、番太、頼母子の計算、貧困者の救済・乞食、子供の相互扶助	五倍子雑筆3、大阪民俗談話会記録
	5月26日	7回 大阪民俗談話会	17名	澤田宅	(「一定せず、歓談をすごした。尚宮本選参のため筆録せず」大阪民俗談話会記録)	五倍子雑筆3、大阪民俗談話会記録
	6月16日	8回 大阪民俗談話会	14名	澤田宅	亥の子行事(宮本)、倉橋島の娘宿(横井)、ほめられる青少年、制裁、青年の気風若者宿、盆と亥の子、山上参 若者入 子供組など、女講のいろいろ、倉橋島の娘宿細説(横井) 娘仲間、恋愛、職人の風俗(雑賀)	五倍子雑筆3、大阪民俗談話会記録
	7月14日	9回 大阪民俗談話会	13名	澤田宅	玉岡松一郎・杉浦瓢「婚姻について」、宮本常一「婚姻と村との関係」	民間伝承1-1、大阪民俗談話会記録
	7月31日-8月6日	日本民俗学講習会が開かれる。澤田は講習会には不参加。大阪からは西谷勝也、岩倉市郎、岸田定雄、宮本常一などが参加。				
	9月15日	10回 大阪民俗談話会	19名	澤田宅	小谷方明「小さな祠とその祭祀法」、杉浦瓢・鈴木東一「カゴ屋の話」、宮本常一「民間伝承の会の設立」	民間伝承1-2
	9月22日	見学・座談会	15名	北区駕友	葬儀人足の着物の着方、行列の型	民間伝承1-2
	10月13日	11回 大阪民俗談話会	19名	澤田宅	竈の信仰、便所の信仰、祭礼行事	民間伝承1-3、大阪民俗談話会記録
	10月28日	大阪民俗学講演会	300名	朝日新聞三階講堂	澤田四郎作・大間知篤三・折口信夫・シュミット・西田直二郎・柳田国男・宮本常一	民間伝承1-3
	11月2日	12回 大阪民俗談話会	32名	染料会館	柳田国男・橋浦泰雄・守随一「都市民俗採集について、民謡など」	民間伝承1-3

年	月日	名称	参加者	場所	内容	典拠
	12月8日	13回 大阪民俗談話会	25名	染料会館	横井照秀「民俗学上より見たる遊郭」、食物の座談会	民間伝承1-5
		近畿民俗刊行会会規抄				民間伝承1-5
昭和11	1月	『近畿民俗』が創刊される。				
	1月5日	口承文学の会		堺市鈴木東一宅	近畿民俗支持のために口承文学休刊を決議。	民間伝承1-5
		柳田国男執筆記事『近畿民俗』は				民間伝承1-6
	1月12日	14回* 大阪民俗談話会		澤田宅	渋沢敬三「足半、塩、出産習俗など」	民間伝承1-6
	1月12日	民俗映画会	40名	染料会館	渋沢「アチック・ミュージアムの沿革と採集事業について」アチック撮影のフィルム映写(十島、三面、越後、桑取谷など)	民間伝承1-6、大阪民俗談話会記録
	1月18日	15回* 大阪民俗談話会		澤田宅	柳田国男・橋浦泰雄・大間知篤三「宮座の話、長期講習、近畿民俗、採集計画など」	民間伝承1-6
	1月19日	町家見学			橋浦・大間知を堺に案内	民間伝承1-6
		民間伝承の会大阪支部と改称				民間伝承1-6
	2月23日	16回* 大阪民俗談話会		染料会館	小島勝治「河内の職人調査」	民間伝承1-7
	3月8日	17回* 大阪民俗談話会	11名	染料会館	宮本常一「村の互助制と方法」、織戸健造「西葛城村探訪談」、小島勝治「まりのくけ方」	民間伝承1-8
	4月12日	18回 大阪支部例会	16名	染料会館	岸田定雄「鳥取県東伯郡三朝の石工」、鈴木東一「天草御所浦島與一浦の見聞談」	民間伝承1-9
	4月16日	19回 大阪支部例会	不明	澤田宅	桜田勝徳「土佐の探訪談、死人の島、四万十川の鮎漁」	民間伝承1-9
	5月5日			澤田宅	柳田国男・柳田為正・平山敏治郎・藪重孝・宮本常一	五倍子雑筆4・5
	5月10日	20回 (第20回談話会)	9名	染料会館	太田陸郎「市について」、市をめぐるて	大阪民俗談話会記録
	6月14日	21回 大阪支部例会	14名	染料会館	横井照秀「奈良県吉野郡野迫川村の若者について」、共同話題「氏子総代について」	民間伝承1-10、大阪民俗談話会記録
	7月12日	22回 大阪支部談話会	16名	染料会館	小島勝治「綿作の話」、杉浦瓢「農耕の田水について」、宮本常一「南河千代田村の水、滝畑の話」	民間伝承1-12
	8月30日	23回 大阪支部例会	13名	澤田宅	渋沢敬三ほか「朝鮮地方土産話」、杉浦瓢「天川村広瀬のサンカの漁法」	民間伝承2-1
	9月12日	宮本常一『周防大島を中心とする海的生活誌』の出版記念会を民俗談話会で行う。				
	9月19日-3月20日	日本民俗学連続講習会		懷徳堂		民間伝承2-2
	9月19日	24回 (第24回談話会)	11名他	染料会館	柳田国男出席。	大阪民俗談話会記録
	11月28日	25回 (第25回談話会)	不明	染料会館	柳田国男が講習会講義のために来阪したのを機に有志が集まって座談会。日本民俗学講習会報 第5号に要領を載せたという。	大阪民俗談話会記録
昭和12	5月30日	26回 近畿民俗学会談話会例会	11名	染料会館	宮本常一「瀬戸内海東部見聞談」、井野邊「岡山県牛窓の盆踊り歌」	民間伝承2-10
	6月27日	27回 近畿民俗学会談話会例会	11名	染料会館	宮本常一「若狭採集旅行、年齢階級制」、岸田定雄「大和の鳥勸請」、田植え行事の座談	民間伝承2-11
	7月25日	28回 近畿民俗学会談話会例会	10名	染料会館	山田隆夫「兵庫県氷上郡鴨庄町の七夕および盆行事」	民間伝承3-1
	9月19日	29回* 近畿民俗学会民俗談話会	4名	染料会館	宮本常一「周防平郡島の地割制度、軀子制度、頭屋および安下庄町の若者宿など」	民間伝承3-2、大阪民俗談話会記録
	10月24日	30回* 近畿民俗学会民俗談話会	9名	澤田宅	岸田定雄「イヌビワの方言、カンジョウ掛の習俗」ほか	民間伝承3-3、大阪民俗談話会記録
	11月28日	31回* 近畿民俗学会民俗談話会	10名	染料会館	神の問題、頭仲間の行事、戦争の習俗	民間伝承3-5
昭和13	1月29日	近畿民俗学会講演会	65名	神戸市医師会館		民間伝承3-6
	1月30日	32回* 近畿民俗学会民俗談話会	5名	染料会館	物の単位および労働量、一人前	民間伝承3-7
	2月27日	33回* 近畿民俗学会民俗談話会	10名	染料会館	家族の連合、分家の仕方	民間伝承3-7

年	月日	名称	参加者	場所	内容	典拠
	3月13日	34回* 近畿民俗学会例会	7名	染料会館	山田隆夫「わん木地について」、橘文策「会津木地屋の現状」	民間伝承3-10
	4月17日	35回 近畿民俗学会例会	8名	染料会館	岸田定雄「茅の言語学的考察、信仰と行事」、平山敏治郎「丹後久美浜の民俗調査」	民間伝承3-10
	4月23日	近畿民俗学会講演会		和歌山高等商業学校		民間伝承3-9
	5月22日	36回 近畿民俗学会例会	9名	染料会館	岸田定雄提出「七度及び七度半」「リレー式行事」、山田隆夫「木地屋について」	民間伝承3-10
	6月26日	37回 近畿民俗学会例会	8名	染料会館	岸田定雄提出の質問「血の問題」	民間伝承3-11
	7月1日	太田陸郎: 応召、陸軍少尉として、中国大陸へ。昭和17年10月29日内地勤務へ帰任の途上で戦死。			戦地から『民間伝承』に多くの報告を送る。	
	7月31日	38回 近畿民俗学会例会	10名	染料会館	「一人前以下」の問題、身体異常とその信仰、砂糖以前、灌漑の慣習。	民間伝承3-12
	8月28日	39回 近畿民俗学会例会	9名	染料会館	杉浦瓢「香川県男木島の見聞」、宮本常一「大和越智岡村寺崎の宮座など」、小谷方明「和泉久世村の講」	民間伝承4-1
	9月18日	40回 大阪民俗談話会	11名	染料会館	山田隆夫「ボルネオのシーダイヤク族の習俗」、岸田定雄「南牟婁郡誌の方言学的紹介」 牧田茂「海村調査から」	民間伝承4-2
	10月1日	近畿民俗学会公開講演会	100名	信濃橋岡島会館	倉田一郎「神意の示顕」、山根徳太郎「住吉神社祭神考」、牧野信之助「村落結合の過程」	民間伝承4-2
	10月23日	41回 大阪民俗談話会	10名	橘文策宅	木形子研究家の橘の業績見学。	民間伝承4-3
	11月27日	42回 大阪民俗談話会	8名	染料会館	感情を表す動詞、『郷土生活の研究法』分類篇住居、鈴木植物標本と語彙、山田の因幡木地屋探訪談。	民間伝承4-4
	12月18日	43回 (民俗談話会)	8名	染料会館	感情を表す形容詞、郷土生活の研究法輪読、植物の民俗、年中行事採集整理など	大阪民俗談話会記録
昭和14	1月22日	44回 大阪民俗談話会	9名	染料会館	『郷土生活の研究法』食物篇を中心に晴の食物について報告。	民間伝承4-6
	2月12日	2月臨時会 古鏡見学	13名	高石町山川氏邸	古鏡見学	民間伝承4-7
	2月26日	45回 大阪民俗談話会	7名	染料会館	各氏採集苦心談、水の問題、しつけの問題。『郷土生活の研究法』食物篇。	民間伝承4-7
	3月19日	大阪民俗談話会	8名	染料会館	橘文策「宮城遠刈田の木地屋習俗について」	民間伝承4-8
	4月23日	4月例会 大阪民俗談話会	6名		奈良県橿原神宮聖域拡張事務所で発掘遺物見学、および郡山町東郊稗田の環濠垣内や廣大寺池の灌漑制度の見学	民間伝承4-9
	6月20日	澤田四郎作: 軍医予備見習士官として応召				民間伝承4-10
	6月24日	近畿民俗講演会	64名	奈良図書館	岸田定雄「てぐり持の話」、笹谷良造「民俗学の現在及び将来」、野村伝四「野神さんの話」	民間伝承4-11
		山城当尾村探訪・無足人				近88;p32
	7月16日	49回 大阪民俗談話会	10名	染料会館	高谷重夫「兵庫県の頭行事について」、山田隆夫「美濃揖斐郡坂内村の出作小屋について」	民間伝承5-1
	10月17日	大阪民俗談話会	18名	記載ナシ	宮本常一「十津川探訪談」。宮本氏の送別会を兼ねて開催。	民間伝承5-4
	10月25日	宮本常一: 上京、アチックミュージアムに入る。妻子は大阪におく。				
	11月23日	大阪民俗談話会	7名	記載ナシ	『郷土生活の研究法』の労働の項の研討	民間伝承5-4
	12月10日	53回 大阪民俗談話会	12名	染料会館	『郷土生活の研究法』労働篇の輪講。高谷重夫「越前西谷村温見の探訪談」、宮本常一「鳥根県広島地方探訪談」	民間伝承5-5
昭和15	1月21日	54回 大阪民俗談話会	13名	染料会館	鈴木東一「和歌山県下津川の探訪談」、平山?治郎氏「下総高岡村の探訪談」。『郷土生活の研究法』輪講 (後藤貞夫)	民間伝承5-6
	2月18日	55回 大阪民俗談話会	5名	染料会館	水木直箭発掘の「山の神とオコゼ」懇談	民間伝承5-7
	3月17日	56回 大阪民俗談話会	5名	染料会館	鈴木東一「南河内郡高向村の民間療法」、『郷土生活の研究法』輪講 (平山敏治郎)	民間伝承5-8
	4月21日	57回 大阪民俗談話会	6名	染料会館	西谷勝也「東播地方の頭組織の講話」	民間伝承5-9
	5月19日	58回 大阪民俗談話会	6名	染料会館	山田隆夫「北摂地方山村の民俗採集談」、『郷土生活の研究法』輪講	民間伝承5-10
	6月16日	59回 大阪民俗談話会	8名	染料会館	杉浦瓢「河内における灌漑用水について」	民間伝承5-11

年	月日	名称	参加者	場所	内容	典拠
	7月21日	60回 大阪民俗談話会	11名	染料会館	小谷方明「和泉における池水文化」、郷土生活の研究法輪講(年中行事)	大阪民俗談話会 会報8
	8月18日	61回 大阪民俗談話会	7名	染料会館	小島勝治「あんこうとなかま」、輪講続き	大阪民俗談話会 会報9
	9月15日	62回 大阪民俗談話会	20名	染料会館	渋沢敬三出席。山田隆夫「神戸市山村の民俗」、郷土生活の研究法輪講(古法 呪法)	大阪民俗談話会 会報10
	10月20日	63回 大阪民俗談話会	11名	染料会館	高谷重夫「阿波東祖谷村深淵村を中心とする採訪談」	民間伝承6-3、 大阪民俗談話会 会報11
	11月17日	64回 大阪民俗談話会	7名	染料会館	鳥越憲三郎「聖林を中心とする古代琉球の村落の発生」	民間伝承6-4、 大阪民俗談話会 会報12
	12月15日	65回 大阪民俗談話会		染料会館	鈴木東一「和泉の父鬼の紹介」	民間伝承6-4
昭和16	1月19日	66回 大阪民俗談話会	13名	染料会館	岡見正雄「花まつり」	民間伝承6-5、 大阪民俗談話会 会報14
	2月16日	67回* 大阪民俗談話会	14名	染料会館	岩田準一「志摩国崎の年中行事」	民間伝承6-7、 大阪民俗談話会 会報15
	3月16日	68回* 大阪民俗談話会	13名	奈良図書館	水木直箭	民間伝承6-8、 大阪民俗談話会 会報16
	4月13日	臨時談話会	12名	澤田宅	渋沢敬三、宮本常一來る	大阪民俗談話会 会報17
	4月20日	69回 大阪民俗談話会	7名	染料会館	松本貞枝「紀伊加茂村大窪の民俗」座談 一人前とその表示方法	民間伝承6-9、 大阪民俗談話会 会報18
	5月18日	70回 大阪民俗談話会	12名	染料会館	高谷重夫『産屋資料の展望』座談 出産・ ててなし児・へそくり	民間伝承6-10、 大阪民俗談話会 会報19
		今次の会より大阪民俗学会と改称				民間伝承6-10
	6月15日	71回 大阪民俗学会例会	13名	染料会館	杉浦瓢「野暮のやりくり」座談 へそくり に関連して	民間伝承6-11、 大阪民俗学会会 報19
	7月14日	澤田四郎作: 召集令により満光6004部隊に入隊。即日見習士官として満州に駐屯、黒河省山神府陸軍病院に勤務。 小島勝治: 澤田四郎作応召のあとをうけ、民俗学会の世話人の一人となる。				
	7月20日	72回 大阪民俗学会例会		染料会館	小島勝治「町方の奉公人」座談 お化粧を した神仏(辰井隆氏提出)	民間伝承6-11
	(未詳)	73回				記録なし
	9月21日	74回 大阪民俗学会例会		明石水産試験場	松井佳一「民俗学的に見た水産」	民間伝承7-2
	10月	小島勝治: 教育召集。昭和17年1月 召集解除。4月に再召集され、中国大陸に赴任。昭和19年7月28日 戦病死と伝えられる。				
	10月19日	75回* 大阪民俗学会例会		澤田宅	高谷重夫「和泉宮座についての中報告」	民間伝承7-3
	(未詳)	76回				記録なし
	12月21日	77回 大阪民俗学会例会		澤田宅	宮本常一「四国寺川の民俗(続報)」	民間伝承7-5
昭和19	7月19日	大阪民俗談話会再開第1回	4名	多井宅	(宮本常一が帰ってきたことで、動き出した ものか。謄写版、民俗学研究所蔵)	大阪民俗談話会 再開記録
	7月29日	大阪民俗談話会再開第2回	2名	多井宅		大阪民俗談話会 再開記録
	8月13日	大阪民俗談話会再開第3回	3名	多井宅		大阪民俗談話会 再開記録
昭和22	11月29日	澤田博士歓迎会		奈良女高師	大和民俗学会主催	民間伝承12-5・ 6
昭和23	2月8日	近畿民俗学会復活総会	約20名	澤田宅	渋沢敬三。近畿民俗学会再出発の計画など。	民間伝承12-5・ 6
	4月18日	復活第一回例会				
	(この間、まず隔月開催の予定が毎月になったとのことだが、具体的な日付が不明。毎月第三日曜日)					

年	月日	名称	参加者	場所	内容	典拠
	9月26日			家庭薬品組合事務所	岸田定雄「大和に残る星の古名について」	民間伝承13-1
	10月17日?				平山敏治郎「史料としての伝説」	民間伝承13-2
	11月21日?				笹谷・澤田	民間伝承13-2
昭和24	1月16日	近畿民俗学会例会	26名	家庭薬品組合事務所	宮本常一「兵庫県水上郡鴨庄村の村落組織について」、錦耕三「若狭のダイジョウ講」	民間伝承13-3、 岩井宏実大福帳
	2月20日	近畿民俗学会例会	25名	家庭薬品組合事務所		岩井宏実大福帳
	3月27日	近畿民俗学会例会	18名	家庭薬品組合事務所	宮本常一「村の構成」、津田秀夫「能勢山王村」	民間伝承13-5、 岩井宏実大福帳
	4月24日	近畿民俗学会例会	22名	家庭薬品組合事務所		岩井宏実大福帳
	5月22日	近畿民俗学会	22名	家庭薬品組合事務所	平山敏治郎「史料と民俗学」(第3回民俗学講座)	民間伝承13-6
	5月29日	朝日新聞社古典講座講演		奈良女子大学講堂	柳田国男「大和と民俗学」	近畿民俗1
	6月19日	(近畿民俗学会例会)	12名			岩井宏実大福帳
	7月17日	(近畿民俗学会例会)	14-5名	今橋の家庭薬品組合	岸田日出男「吉野の修験道」	宮本常一の日記
	(この間、おそらく月例で会があったと思われるが、日付等の情報を確かめる記録未確認)					
	10月16日	(近畿民俗学会例会)	10名ほど	今橋の家庭薬品組合	柴田「上代の埋葬の話」	宮本常一の日記
	12月18日	近畿民俗学会例会		大阪家庭薬品組合事務所	松井佳一「水産と民俗」、酒井忠雄「平野郷のクリ綿の話」	民間伝承14-3、 宮本常一の日記
昭和25	2月26日	近畿民俗学会			錦耕三「ダイジョウコウの話」	宮本常一の日記
	3月19日	近畿民俗学会例会		家庭薬組合	保仙純剛「最近の採集帖より」	民間伝承14-6
	4月26日?	4月例会		澤田宅	錦耕三「若狭のダイジョウコウの話」、宮本常一	近畿民俗3、 民間伝承14-7
	5月28日	近畿民俗学会研究会		大阪営林局官舎	榎垣実「方言採集」、その他座談会	民間伝承14-8
	8月19日?	近畿民俗学会第1回共同調査			北江川の探訪、滋賀県高島郡津町梅ヶ原	民間伝承14-10、 五倍子雑筆12
	8月27日	近畿民俗学会例会		大阪営林局官舎	竹田聰洲「同族結合の紐帯」、 「郷土生活の研究法」輪読	民間伝承14-10
	9月24日	近畿民俗学会第2回共同調査			兵庫県宍粟郡奥谷村富栖村および原、音水	五倍子雑筆12
	10月29日	近畿民俗例会		大阪営林局	柳田、折口両先生を中心とする座談会	民間伝承14-12
	12月10日	近畿民俗学会例会		大阪営林局宿舎	錦耕三ほか5名「兵庫県宍粟郡奥谷村」	民間伝承15-1
昭和26	1月20日	118回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	乾健治「丹波市の伝説」、高谷重夫「志摩国南海村の民俗」	近畿民俗5、 民間伝承15-3
	2月25日	119回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	岩井宏実「大安寺の頭屋行事」、林宏「大和の民間療法」、野村豊「三島のり」	近畿民俗5、 民間伝承15-5
	3月18日	120回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	岸田定雄「肩車考(大阪町聞書)」、榎垣実「隠語と符牒」	近畿民俗5、 民間伝承15-7
	4月22日	121回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	鷺尾三郎「灘酒造歌に就いて」、西本珠夫「丹波篠山沢田の鱧祭」	近畿民俗5、 民間伝承15-6
	5月28日	122回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	池田源太「ケルト人の口誦伝承の習俗」、 錦耕三・岩井宏実「若狭探訪談」	近畿民俗5
	7月1日	123回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	平山敏治郎「越前岡本村探訪談」、樋口孝太郎「ヤク除箸の話」、岸田定雄「大和民俗探訪談」	近畿民俗5
	7月8日	124回 近畿民俗学会例会		澤田宅	渋沢敬三先生を囲む座談会	近畿民俗5
	7月29日	125回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	錦耕三「マナ神事の一考察(マナバシとヤクヨケバシ)」、鳥越憲三郎「桜井谷の民俗」、 岸田定雄「信州東京旅行雑談」	近畿民俗5、 民間伝承15-9
	8月19日	126回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	岸田定雄・鳥越憲三郎「北山峡調査報告」	近畿民俗5

年	月日	名称	参加者	場所	内容	典拠
	9月23日	127回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	橋本鉄男「荘厳と大荘厳」、平山敏治郎「対馬調査報告」	近畿民俗5
	10月23日	128回 近畿民俗学会例会	54名	澤田宅	柳田国男先生を迎えて座談会。民俗学の名称、社会科の目的、エビス神、米の話、弥勒信仰など。	近畿民俗5、岸田定雄論文『柳田国男先生』所収
	11月25日	129回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	高谷重夫「度会郡漁村民俗採訪談」、保仙純剛「大和民俗採訪談」	近畿民俗5、民間伝承16-1
	12月9日	130回 近畿民俗学会例会		営林局深山寮	鳥越憲三郎「西能勢の民俗」、平山敏治郎・竹田聴洲「平戸調査報告」	近畿民俗5、民間伝承16-2
昭和27	2月17日	近畿民俗学会例会		大阪営林局宿舍	菅沼見次郎「但馬の牛」、津田秀夫「近木の櫛」	民間伝承16-4
	3月16日	近畿民俗学会例会		大阪営林局宿舍	保仙純剛「ちゃんちゃん祭」、土田英雄「六島漁村採訪」	民間伝承16-5
	4月22日	大藤時彦西下、近畿民俗学会の諸氏と秋の民俗学会年会の件を打ち合わせる				民間伝承16-6
	5月18日	近畿民俗学会例会		澤田宅	鈴木東一「岸和田山村の町中行事」、平山敏治郎「近江山前のオコナヒ行事」	民間伝承16-7
	6月15日	近畿民俗学会例会		大阪営林局官舎	岸田定雄「大和聞書」、岩井宏実「有馬採訪談」、錦耕三「若狭の祭」	民間伝承16-8
	7月13日	近畿民俗学会例会		大阪営林局宿舍	錦耕三「若狭の祭（第二講）」、榎垣実「フモゼ考（蚕）」	民間伝承16-9
	8月24日	近畿民俗学会例会		大阪営林局宿舍	鳥越憲三郎「大台ヶ原民俗採訪」、錦耕三「若狭の祭（二）」	民間伝承16-10
(この間、おそらく月例で会があったと思われるが、日付等の情報を確かめる記録未確認)						
昭和28	6月28日	140回		大阪営林局	平山敏治郎「能登採訪談」	近畿民俗12
	7月19日	141回		大阪営林局	保仙純剛「熊本県五箇山採訪談」	近畿民俗12
	8月23日	142回		大阪営林局	水木直箭・岸田定雄「大和吉野郡民俗調査」	近畿民俗12
	9月20日	143回		大阪営林局	高谷重夫「滋賀県湖北採訪談」、水木直箭「折口先生追憶談」	近畿民俗12
	10月18日	144回		大阪営林局	辻野セツ子「高知県土佐郡地蔵寺村採訪談」、竹田聴洲「羽黒山及び陸中採訪談」	近畿民俗12
	11月28日	145回		あやめ池大劇場	近畿地区民俗芸能大会見学	近畿民俗12
	12月20日	146回		大阪営林局	小林茂「部落の話」、鳥越憲三郎「トカラ十島調査」	近畿民俗12
昭和29	2月11日	147回	8名		岩井宏実「奈良県山辺郡東里村笠間の年中行事と結婚葬送」	近畿民俗13

- この記録が昭和29年の2月の第147回で終わっているのは、単に時間がなかったからで、特別な意味はない。
- 短時間で作成したので、多くの点で不十分である。あるいは、すでに近畿民俗学会などでの網羅的な整理があるかもしれないけれども、参照できなかった。今後、充実させていきたい。
- 主として、『民間伝承』『近畿民俗』を使った。足りないところを、『五倍子雑筆』等で補っている。回数の表記で、肩にマーク(*)があるものは、推定。回数に関しては、他の事業との関係でやや解釈のゆれがあるのではないと思われる。
- 成城大学民俗学研究所所蔵の『大阪民俗談話会会報』は、宮本常一が去ったあと、昭和15年から活版で作られた会報である。それ以前の『大阪民俗談話会だより』として出されたものについては、おそらく同人のあいだとりわけ、小谷方明や後藤捷一の所蔵のなかに残っているかと思うが、調べていない。成城にある『大阪民俗談話会記録』という謄写本文を和綴じにしたものは、おそらく成立経緯がそれとは異なる。宮本常一が、昭和11年のあたりになってから、自分のノートをもとに再構成した記録と思われるからである。
- 「岩井宏実大福帳」とあるのは、大谷大学で行われた柳田国男の会の席上にて、岩井氏がお持ちになられた昭和24年の1月から6月までの例会の開催日と出席者の署名がある資料。もともと大福帳形式であったものを、宮本常一誕生100周年の記念展覧会に貸し出すために、表装し巻物にしたとのこと。ここに記載されている人名に、出席者でありながら署名していない、岩井の分を加えて、出席者数にした。

れた問答や交流が「日本民俗学史」の主題として浮かびあがるのは、それゆえである。もちろん、調査採訪を軽視しているわけではない。それが理論史としての学史とはことなる、実践史・方法史として重要な学史の領域を構成しうることは、社会学史においても人類学史においても民俗学史においても同様である。

⑤再び、民俗学における「歴史」とは何か

最後にもういちど、「年表」型のアプローチの限界を、資料の拡大という「民俗学」が果たしてきた方法的な役割とからめて論じ、「もうひとつの歴史学」としての本願を確認しておこう。

年表の本質は、「表」すなわち一覧できるように整理され、空間的に配置されたリストというところにある。そこで表現されている関係は、空間的な並置であり、ただ並べられたなかでの距離や順序や隣接の関係に止まっている。つまり、論述の文体である「散文」のように、説明や因果的な関連づけには踏みこまないまま、年表はわずかに時間的な前後関係を表象しているにすぎない。しかも逆転しがたく絶対的なもののようにあらわれる、その前後関係を支えているのは、超越的で外在的で普遍的な「時間」の流れという、抽象的で形式的な枠組み¹⁹⁾ではない。

しかしながら、人間にとって「歴史」を意味のある物語、別な言い方をすれば説明力をもつ物語たらしめているものは、そうした形式的で外在的な時間の推移、すなわち機械時計によって測られ標準化された時の連続性ではない。むしろ、いま生きている主体である人間の「意味づけ」であり、人間によって「生きた」関連づけである。ベンヤミンは、それを「均質で空虚な時間」と「生きた時間」との対照においてとらえ、私はそれを「足し算としての歴史」と「かけ算としての歴史」という対比に言い換えて説明した〔佐藤健二 二〇〇六・二九一—二九四〕。

年表は、結局のところ足し算に支えられた技法でしかない。もちろん、足し算において間違えないようにする、その基本的な技法の習得をないがしろにする必要はないが、われわれに求められているのは、かけ算という相互性の融合の理解に踏みこんで「関数」や「微積分」のような、いわば「関係」あるいは「関係分析」の論理を歴史認識において拓くことである。

民俗学がなぜ、身ぶりや声の「ハビトゥス」、すなわち慣習的実践の領域に資料の採集を拡げることになったのか。それは年表に加えられる空白を埋めてきた「書かれた記録」の「部分性」を発見したからである。「文書記録」と「採集記録」という、古くて新しい対立がここでも顔を出す。もちろん、この二つを固定的に考え、対立をそのまま歴史学と民俗学とに投射してしまう類の方法論は、不自由な自己呪縛であって、議論の組み立て方そのものが間違っている。いうまでもなく、面接や観察を通じての採集記録、すなわち身ぶりや声としての記録もまた、書かれたものと同じく「部分性」を免れないからである。ただし、書かれた資料においては、それがさまざまな情報をもつ物質として残っていることを手がかりに、書いた主体や書かれた場や伝えられた経緯などを探り出し、その時代性を考察しやすいという利点があった。これに対して、口承資料は、そうした生成の場とのつながりを周辺資料の収集と総合のなかで探っていかなければならない困難を抱え込んでいる。その苦勞と柳田が直面していたこともまた『史料としての伝説』(一九四四)や『口承文芸史考』(一九四七)などから読み取れる。

にもかかわらず、身ぶりや声の観察と採集とが戦略的であるのは、書かれることですでに切り離され、保存されることで、現在の生活から忘れられてしまうこともある文書記録とは異なり、遂行という行為によってあるいは発話という実践において繰り返し返される「眼前の事実」という意味での「現在性」を有しているからである。その「現在性」は、説明

されるべき現象であり、歴史として認識されるべき拘束性や、そこからの切断としての自由を表象している。現在の現象に、構造的に作用している力のありようを、変遷として、あるいは変容として語ることができる時、われわれは「歴史」を構築しえたといえるのである。

起源の探究という二つの知的操作

われわれが年表的な知識に止まってはならないのは、歴史の認識が過去の前身、すなわち以前そうであったという形態の発見にとどまるものではないからである。このことを明確に主題化したのは、フランスの社会史家のマルク・ブロックであった。

ブロックの『比較史の方法』(一九二八―一九七八)は、ちょうど柳田国男がやがて「聳入考」となる婚姻制の考察を史学会で講演した頃にかかれたものだが、後に社会史と呼ばれるようになる立場の方法意識を鋭く提起している。ブロックは、歴史家ルナンの「歴史における類似は、必ずしもつねに関連の存在を暗示しているとは限らない」という言葉を引用しつつ、類似性の認識が無自覚に模倣や伝播といった説明を立ち上げてしまう危うさを切断している。民俗学がいかに外形の類似から、安易に伝承を仮定し呼びよせてしまうかを考えるならば、この警告は他人ごとではない。さらに比較の方法こそが、原因の探究における前進を可能にするとして、「起源の問題」すなわち「起源という表現のもつて、その本質において異なり、かつ、その射程においても等しくない二つの知的操作が混同されがちである」問題に踏みこんでいる点は、比較の意義を強調した『郷土誌論』の歴史認識の方法と深く呼応している。

そこでいう「起源の問題」すなわち「二つの知的操作の混同」とはなにか。ブロックは、一四世紀から一五世紀のフランスにおいて注目される「三部会」、僧侶・貴族・平民からなる身分制議會を例に、次のように説明している。

第一の知的操作は、「三部会がしばしばそれらの発展形態としか考えられないより古い諸制度(たとえば、公や伯の會議)」の探究で、前身となるものの研究である。それはまったく必要なもので、正しく押さえなければならぬ知識でもある。しかしながら、そこに付随して、しばしば混同されがちな第二の知的操作がある。それは変容の契機であり、変化が生み出されるメカニズムの把握である、という。

「この伝統的組織が、何故、所与の時期に拡大し、かつ新たな意味を獲得したのか、そして、それが何故、三部会すなわち政治的な、そして特に財政的な役割を与えられ、君主ないしその顧問會議に対しておそらく従属的ではあるがそれとは明確に区別される力——これは、無限に多様な仕方でも当該地方の社会的諸力を究極的には表現するのだが——をもっていることを自覚している會議体に変容したのかを説明しうる理由を発見することである。胚を明らかにすること、それは発芽の原因を発見することではない。」[Marc Bloch 1928 Ⅱ一九七八:二三]

ブロックは、「多数の瑣細な地方的事実の迷路に迷い込む」だけの探究は「不可避的に、基本的なものを看過する」ことになると警告し、「一般的現象の原因は、同様に一般的なものでなければならぬ」として、「全ヨーロッパ的規模の」類似の比較の重要性を強調するが、次のような忠告も忘れずに加えている。

「私の言わんとするところを誤解しないでいただきたい。私が、今示唆したヨーロッパ全体にかかわる大問題の解決のための探究にとりかかるために、その著者たちが、彼らの固有の研究領域を放棄することなどを要求しているのではない。全く反対である。彼らが、

相互に孤立して、各自勝手にやっていたのでは、その問題を解決することはできないということに自覚してほしいのである。ただし、彼らがわれわれに提供できる重要な貢献がある。すなわち、彼らは、彼らが対象とする地域において、三部会あるいは身分制議会の出現に先行しあるいは随伴し、かつそのことによって、暫定的にせよこれらの生成の可能的諸原因の中に含まれるべきものと考えられる様々な政治的・社会的諸現象を明らかにすることである。こういった研究に際して、他の地域についてすでに得られた諸結果を吟味してみることに一言でいえば、小範囲の比較史——は、彼らの注意をどこに向ければいいのかを定めるのに有効であろう。全体的比較は、そのあとでなければおこなわれえない。前提となる地方的研究がなければ、全体的比較をおこなっても、実りがないのである。しかし、全体的比較のみが、考えられる諸原因の密林の中から、一般的影響力をもつもの、すなわち、真の原因だけを見分けることができるのである。」〔同前二二四—二二五〕

こうした視点は、たとえば柳田国男の「一国民俗学」という特殊な表現をめぐって九〇年代に繰り広げられた閉鎖性や国民国家的性格をめぐる議論の不毛さや、その反動という要素もあった「比較民俗学」への安易な同調や流行の批判すべき軽薄さを思い起こさせ、あるいは地方民俗学史の発掘へとわれわれの課題を導くだろう。

変数の構成、あるいは博物学と代数学

ブロックが論じた第二の知的操作の重要性は、ある意味では「かけ算としての歴史」の比喩を延長するなかで理解することができる。もつとも単純化していえば、ちょうど関数や変数を含んで成立する「方程式」とある時点において観察される「値」の関係を考えればよい。個々の現象

形態は、すべて「値」である。それがいかなる「変数」に属するものなのかも探り出すべき問題だが、変数間の関係を記述する「方程式」のレベルでとらえられる構造もまた、知的探究がとりくむべき重要な課題である。

さらに比喩ではあるが、「博物学」と「代数学」という対比を提示しておきたい。日本民俗学史の構築においては、地方において忘れられ埋もれてしまった研究や研究者たちの発掘や、場としての研究誌の探索や残された論考の収集など、いわば「博物学」的な作業もまだまだ必要であろう。しかし、それだけでは不十分である。そこで観察されたものを「値」として捉え直し、背後に潜む「変数」をあぶり出す「代数学」的な作業もまた、同時に立ち上げられる必要がある。国語教育を含めた近代の学校教育システムは、その作用を深く考えてみなければならぬ変数の一つであったと思うし、意外なことに郵便や鉄道などの交通手段の発達も、ガリ版から写真にいたる記録複製技術の展開も、日本民俗学史の構築において無視できない変数として関与している。学校や交通や印刷を含むメディアの介在を、重要な変数として考えるような民俗学史の書き換えは、私自身にとっても魅力的な課題である。

最初に述べたように、まだ準備は不十分であるが、そのような構えにおいて「近代日本民俗学史」を構想してみることは、「民俗学」という概念の縛りを、ある意味で解放し、別な意味では積極的に選択するために、必要である。現状を告発するためではなく、かつてあったかのよに信じられた可能性の中心を捉え直したい。

この覚書は、そうした基礎作業のために書かれた。

註

(1) 「民俗学」の範囲設定それ自体が、今日では揺れている。柳田国男の用語に戻って考えるなら、「青年と学問」が論じた「フォークロア」や「日本の民俗学」だけ

でなく、「郷土研究」「郷土誌」「郷土生活の研究」「民間伝承」や、「土俗学」「地方学」「南島研究」「農村生活誌」「ルーラル・エコノミー」「ルリオグラフィー」「神道史」「農民政芸」「口承文芸史」「世相研究」等々の多様で幅広い表現をすべて含めて、ここでは「民俗学」と考える。

(2) 「総体化」は社会学者の見田宗介のことで、「管理化」といういわば上からの全体の透明化が、結局のところ「意味の多次元性の粛清」でしかないことに対抗する、もうひとつの透明化として設定されている。すなわち見田の表現を借りれば「管理化されたシステムの論理によって、存在的・存在論的に二重に抑圧され圧殺されたものたちの自己回復」(見田宗介一九七六・二二)であり、「諸個体のもつ意味の諸次元の総体性の奪回」と「全体の具体的な連関の総体性の獲得」という二重の全体性を志向するという意味で、対抗するもうひとつの透明化であると考えている。この点については、佐藤健二(二〇〇〇)で論じたことがある。

(3) 「一国民俗学」という名乗りが、一九九〇年代に村井紀が言挙げし、子安宣邦がフレームアップして、川村湊や赤坂憲雄をはじめとする多くの論者が追隨した図式での役割ほどには意味をもたされたものではなく、「万国民俗学」「比較民俗学」と対比した、二つの「ミンゾクガク」あるいは「フォルクスクンデ」と「フェルケルクンデ」の訳し分けの便宜でしかなかったことについては、別稿(佐藤健二二〇〇二・六〇一・六四)で論じている。

(4) 「日本の民俗学史についての記述研究は必ずしも多くない。専門的に日本民俗学史を研究している研究者もいない」(福田アジオ二〇〇九・二)、と福田は言う。結果としては、正しい指摘なのだと思う。自らの学問それ自体の歴史を語ることに、抑圧されてきたのだという説明も成り立つだろう。柳田国男の生前には、歴史を語ろうとすれば本格的な柳田国男論を避けるわけにはいかないという重圧がのしかかり、戦後日本民俗学においては、学史を評するよりも、野に出て採訪に勤しむのが研究であるという新しい抑圧が研究者を縛ったからである。また、まだ歴史を語るには若い学問だという自意識も、どこかで作用していただろう。しかし、その分だけ「民俗」「伝承」「常民」といった、基本的に置かれたカテゴリーへの考察が現状に寄りかかって、概念的な彫琢がなおざりにされたという弱点を抱え込むことになった。

(5) 本稿では柳田国男のテキストからの引用は、現在刊行中の筑摩書房版「柳田国男全集」からとし、「巻数・頁表示」を基本に簡略に表示し、書物名や論考の題名などがあつたほうがよい場合などはそのつど補うこととしたい。

(6) 福田氏の説明を文字通りにたどると、「時期区分」を刊行物とりわけ雑誌によって行うことに、批判の実質がある。赤松啓介の認識を「日本の民俗学は『郷土研究』の発刊からとし、明治期の人類学の研究を前史としている。その時期区分も雑誌の刊行年によっている」と批判し、関敬吾の民俗学史を「時期区分が相変わ

らず刊行物の年次にたよっている点が問題である」(福田二〇〇九・三)と書く。たしかに「時期区分」のカテゴリー設定は、歴史認識そのものに関わる問題であるが、「民俗学が何を明らかにしようとして、どのような方法で研究し、その研究は社会の動向と如何に係っていたかをとらえて段階区分する」(同前・三〇四)必要があるという主張と、雑誌や刊行物の重要性を認めることは、私はなんら矛盾しないと思う。

(7) 逆に宮本と赤松の二人に、地方の雑誌への目配りが明確にあることも説明されてよいかもしれない。大阪を中心としての活動を身近に感じていたからか、あるいはフィールドワーカーとしての活動によるものかはわからないが。

(8) 謄写版などで出される場合も多く、少数印刷されたにすぎないものは失われやすいが、なおその地に住んで活動した研究家たちの蔵書には残っていることも多い。それらの発掘もまた、フィールドワークを駆使する民俗学が得意とする活躍の領域である。

(9) これは柳田国男の筆名の一つで、論考の初出の『郷土研究』誌上で使われた。すでに私は、「佐藤健二二〇〇二」において、この筆名で発表された方法論の一連の論考が、南方熊楠の郷土研究批判に対する反応であったことを論じている。

(10) 同様の考えを、柳田国男は後に『国史と民俗学』に収めることになる一九三二(昭和七)年の講演「郷土研究と郷土教育」でも、明確に述べている。すなわち「私などの企て居る研究では、歴史は堅に長い細引のやうなものとは考へられて居ない。寧ろ是を考察する者の属する時代が、切つて与へたる一つの横断面と見るのである。此横断面に頭を出して居る史実、即ち過去にあつたらしき事実の痕跡は、実際はその過程の色々な段階に於て自分を示して居る。我々の社会生活は決して均等には発達し展開して居ない。」(全集一四・一五八)

(11) また歴史の〈現前性〉については、忘却まで含めて論じた方がよい。すなわち現在はずでに忘れられていて、記録のなかに埋もれている、そのような「不在の現前」まで含めて考えるべきであろう。

(12) 発端は糸魚川出身でいま「百霊廟」を調べている慶應大学の渡辺秀樹教授に、「細野雲外」という人物について何か知らないか、と聞かれたのがきっかけであった。郷里の糸魚川で話すことになったので確かめている、という。その名前は聞いたことがあつて、たしか「不滅の墳墓」(厳松堂書店、一九三三)という、伊藤彦造描くところの未来の墓地の風景を口絵にした奇妙な本を書いた人物であることは知っていたが、それ以上のことはよくわからなかった。ついでに調べてみると、世を慨嘆する書物をいくつか自费出版していたらしいが、それらの本の情報源はというと、新聞その他の既存のメディアアらしかった。そして「不滅の墳墓」という本の百霊廟に関する情報については、相馬御風が「キング」に載せた記事の範囲を出るものがないことなどを伝えた。糸魚川での講演について時間が合え

ば聞きに行きたいと言ったところ、話は思わぬ方向に転回して、けっきょく私自身が一緒に講演をする形になってしまった。

- (13) 「青年カード」は大日本聯合青年団が発行していた、通信教育の小冊子で、一枚の表裏刷を折りたたんで八頁構成のものにしている。何次かにわたって発行されたものらしく、柳田は第一次のカードに「都会と農村」(全集二八所収)、第三次のカードに「郷土研究の方法」(全集二九所収)を寄せている。

- (14) 本論において展開すべき重要な論点ではあるが、その準備が十分でないので、欄外で注意喚起しておくが、民俗学において「項目」が果たした役割とその功罪とは、民俗学史の重要な課題だと思ふ。そのことに早く気づき、「項目」に注目した形での調査史の必要を論じたのは、坪井(郷田)洋文「民俗調査の歴史」(一九六〇)である。折口信夫の「民間伝承蒐集事項目安」以前の、人類学の婚礼風俗の研究項目なども視野に入れたものではあるが、内郷村の調査で検討された項目(小野武夫一九二五)や有賀喜左衛門が「民俗」の項目を工夫した信濃教育会の「郷土調査要目」(一九三三)などは取りあげられておらず、「民間伝承」誌上で展開した各種の「要項」の検討も不十分なままに残されている。山村生活調査や沿海諸村の生活調査に使われた「郷土生活採集手帖」や「採集手帖(沿海地方用)」の戦後の再検討を含め、さらに民俗学史の問題として深めて検討していく必要がある。

- (15) 小泉みち子の「研究ノート 本山桂川その生涯と書誌」は「市立市川歴史博物館年報」第一五号(平成一〇年三月二〇日発行)に掲載されたというが、現物は未確認。ただし、市川歴史博物館のホームページ(<http://www.city.chikawa.chibajp.net/kyouiku/rekisi/rekihaku/ronbun/koizumi/koizumi96.htm>)より論文がダウンロードできる。

- (16) 小島勝治については、故人の友人であった松野竹雄・丸山博が中心になって出版した『日本統計文化史序説』(一九七二)において、その主著が見られるようになり、未来社の助力で『統計文化論集』(一九八一―八五)の四巻が著作論考の集成として加えられた。再評価はいずれも統計学の側からが中心で、民俗学からの評価はこれからという段階である。わずかに(小池淳一二〇〇九)が論じ始めている。丸山博が経済統計研究会の発表に際しての付属資料として公刊した『資料 小島勝治と「浪華の鏡」』(一九八一年七月一六日発行)なども、彼が活動した場に接近するためには有効な資料である。

- (17) 太田陸郎については、遺著の『支那習俗』以外の集成はあまり目につかない。管見のなかに『考古民俗雑纂』という一冊があるが、刊記も何もなく、多様な紙質や活字の不揃いなどを見ると抜刷を合本にする方法で作ったとしか思えない一冊である。あるいは、太田の残した「著書」と位置づけるべきものかもしれない。表紙のヒラの部分にはまるで目次のように収録の論文の題名を並べており、

背にも「考古民俗雑纂 太田陸郎」と印刷してある。一六本の所収論文のうちもつとも新しいのが昭和一一年なので、それ以降のある時期に太田自身によって制作された私刊本であろうと思われる。没後であれば、間違いなくなんらかの序跋等々を付けて記念であることを明示するだろうと考ええると、昭和一七年一〇月の飛行機事故以前のものと、さらに出征してからこのような本を出版するのは難しいと考えるならば、昭和一一年から昭和一三年七月までの間に作られたとも推定できる。太田については、安田辰馬が財団法人日本職業協会の機関誌『清流』の第二三号に載せた「異色の民俗学者 太田陸郎先生…ある職業行政人の人間像」という論考を中心に資料を添えて別刷の小冊子(一九七四年七月刊行)を残し、加茂幸男の『太田陸郎伝 民俗学者太田陸郎を語る玄圃梨の記』(一九九二年七月一日発行)と題する私刊本は、遺族関係者が所有していた資料などを利用してながら、年譜に即して記述を進めている。

- (18) この表は二〇〇七年の「柳田国男の会」で報告のために準備し、「柳田国男研究」第六号(二〇〇六)に掲載したものの再録である。

- (19) そうした枠組みの有効性の感覚それ自体が、機械時計の普及や鉄道運行が織り上げていった均質な標準時間の社会的受容など、歴史的社会的な環境を充たす時間意識に支えられていることも見落とせない。この論点はじつは歴史意識を考えらるうえでは大きな問題だが、ここでは深入りできない。

引用文献(発行年順)

- 小野 武夫 一九二五 『農村研究講話』改造社。
 Marc Bloch 1928 'Pour une histoire comparée des sociétés Européennes', *Revue de Synthèse Historique*, Déc., pp.15-50 = 一九七八 高橋清徳訳『比較史の方法』創文社。
 赤松 啓介 一九三八 『民俗学』三笠書房。
 大藤 時彦 一九三八 『日本民俗学小史』『ひだびと』6ノ7・10、7ノ1、飛騨考古学協会。
 大藤 時彦 一九四二(柳田国男)『日本民俗学』国民学術協会編『学術の日本』中央公論社→柳田国男(全集三〇…五二四―五六七)
 宮本 常一 一九四四『民俗研究史』社会経済史学会編『社会経済史学の発達』岩波書店・二五七―二八〇。
 和歌森太郎 一九四七『世界における民俗学の発達』『日本民俗学概説』東海書房。
 関 敬吾 一九五八『日本民俗学の歴史』大間知篤三ほか編『日本民俗学の歴史と課題』日本民俗学大系2、平凡社・八一―一九六。
 大間知篤三ほか編 一九五八『地方別調査研究』日本民俗学大系11、平凡社。

- 郷田(坪井) 洋文 一九六〇「民俗調査の歴史」大間知篤三ほか編『日本民俗学の調査方法 文献目録・総索引』日本民俗学大系13、平凡社・五九一—一〇八。
- 見田宗介編 一九七六『社会意識論』社会学講座12、東京大学出版会。
- 松本三喜夫 一九九六『野の手帖』柳田国男と小さき者のまなざし』青弓社。
- 柳田国男全集編集委員会編 一九九七『柳田国男全集』(全三六巻予定、刊行中)筑摩書房。
- 小泉みち子 一九九八『研究ノート 本山桂川その生涯と書誌』『市立市川歴史博物館年報』第一五号。
- 佐藤 健二 二〇〇〇「社会学の言説：調査史からの問題提起」吉見俊哉ほか編『言説：切り裂く』越境する知3、東京大学出版会・一三五—一五九。
- 佐藤 健二 二〇〇二「民俗学と郷土の思想」小森陽一ほか編『編成されるナシヨナリズム』岩波講座近代日本の文化史5、岩波書店・五一—八一。
- 矢野 敬一 二〇〇四「郷土誌・史編纂と「民間伝承」へのまなざし」『柳田国男研究』第三号、柳田国男の会・二一—三七。
- 佐藤 健二 二〇〇六「歴史と出合い、社会を見いだす」荻谷剛彦編『いまこの国で大人になるといふこと』紀伊国屋書店・二八五—三〇五。
- 佐藤 健二 二〇〇九a「方法としての民俗学／運動としての民俗学／構想力としての民俗学」小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房・二六〇—二八一。
- 小池 淳一 二〇〇九「町・職人・統計：小島勝治論序説」同編『民俗学的想像力』せりか書房・一一—二三。
- 福田アジオ 二〇〇九『日本の民俗学：「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館。
- 佐藤 健二 二〇〇九b「書評・福田アジオ『日本の民俗学』」『週刊読書人』二〇〇九年二月一八日号。

(東京大学大学院人文社会系研究科、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了)

Constructing a History of Folklore Studies in Modern Japan

SATO Kenji

This essay represents a preliminary attempt at constructing a “history of folklore studies” in the context of modern Japan. Because of the overwhelming number and range of studies documenting aspects of the Japanese folklore movement, it is necessary to engage in a process of “comparison,” as Émile Durkheim advocated. By reconsidering the current state of the field, we can investigate alternative ways of studying the subject from a “relativistic” or “holistic” perspective. This essay takes into account how previous historical studies took into account publications issued in local areas or by local research groups, and attempts to rectify the scholarly neglect of such contributions. Historical studies to date as a rule do not fully take into account concrete evidence provided by local folklore studies, even if they try to avoid so-called “Yanagita Kunio centrism.” By shifting our stance, we can take up issues concerning approaches taken up by researchers involving *minzokugaku* (folklore studies) on a localized level, *kyōdo kenkyū* (research on local history and culture), or *kyōdo kyōiku* (methods of teaching local history and culture).

For instance, through the investigation of the local history of folklore studies in Itoigawa, I have stressed the importance studying the work of a literary figure such as Sōma Gyofū. I have also taken into account the painstaking efforts involved in the publication of the discoveries of local researchers such as *The Collected Works of Aoki Shigetaka* (15 volumes published to date). Similarly, the research and compilation of proceedings of the Ōsaka Minzoku Danwa Kai (Osaka Folklore Discussion Society), led by Sawada Shirotsugu, suggests that consideration of the “place,” where the local folklore studies were born plays a crucial role in the subsequent construction of a history of folklore in modern times. The investigation of the “place,” where multiple interests were exchanged and diverse persons interacted with each other can open the way to a revised history of “practice” and “method,” which differs greatly from a history according to “paradigm” and “theory.” In this essay, I evaluate the advantages and disadvantages of the use of “chronological tables.” The “problem of origin,” as proposed by Marc Bloch, who was a close contemporary of Yanagita, is also raised. Furthermore, I propose that an “algebraic” approach, which treats the composition of categories as variables or values and analyses the relation of variables. Such a methodology, while contributing the construction of a revised history of modern Japanese folklore studies, also incorporates what might be called “ecological” or “natural historical” approaches, which focus on searching for research material on a widespread basis and acquiring material objects that are required for study.

Key words : History of local folklore studies, holistic research, place where the folklore studies arose, history of practice and history of paradigm, historical perception
